

(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第92輯

東奈良遺跡

大阪府茨木東奈良第2期第1次住宅建替事業に伴う発掘調査報告書



1995

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第92輯

東奈良遺跡

大阪府茨木東奈良第2期第1次住宅建替事業に伴う発掘調査報告書



1995

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

序 文

大阪府の北部に位置する茨木市は、古くから京都と大阪を結ぶ交通の要衝の地として発展し、現在もJR東海道本線、同東海道新幹線、阪急電鉄京都線、名神高速道路、国道171号線など幹線交通機関の集中する地であり、また大阪市のベッドタウンとしても発展著しい近代都市であります。

しかし、社会の近代化は、時として人々を過去に対して目をそらさせてしまいます。近代化の矛盾があちこちで叫ばれつつある昨今、歴史に目を向け、現代の社会と生活が決して自然にでき上がったものでなく、先人が多くの血と汗と涙を流しつつ、つくり上げてきたものであることを再確認するのも意味あることと言えるのではないのでしょうか。

今回の調査におきましても、弥生時代、中世を中心とした多くの遺構、遺物を確認いたしました。よりよい社会をつくり上げていくためにも、21世紀に向けてこれらの遺産を守り、子孫に伝えていくことが現代に生きる私たちの責務といえるでしょう。

発掘調査にあたりましては、関係者諸氏、諸機関に多大なご援助、ご指導を賜り、深く感謝いたします。今後もさらに文化財の保護等に関しましてご理解、ご協力を頂きますようお願い申し上げます。

平成7年3月

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

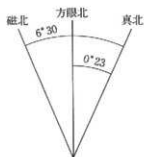
理事長 岩井幹郎

例 言

1. 本書は、大阪府営茨木東奈良住宅内に所在する東奈良遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、大阪府建築部住宅建設課の委託を受け、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもとに、財団法人大阪府埋蔵文化財協会が実施した。
3. 調査は1993年11月11日より1994年3月25日にかけて、整理作業および報告書作成については1994年11月1日より1995年3月31日にかけて行った。いずれも担当者は山元建である。
4. 発掘調査に先立ち、1990年10月に大阪府教育委員会文化財保護課によって調査地内の試掘調査が実施された。担当者は西口陽一、地村邦夫である。
5. 自然科学分析に関しては川崎地質株式会社に委託し、成果を附章として掲載した。
6. 写真撮影は遺構については山元が、遺物については小倉 勝が行った。
7. 発掘調査、整理作業ひいては報告書作成に際して、以下の方々から様々な御教示を賜わった。記して感謝の意を表したい。
奥井哲秀（茨木市教育委員会）、佐久間貴士・宮崎泰史（大阪府教育委員会）、溝口孝司（九州大学）、吉村和昭（奈良県立橿原考古学研究所）、井上智博（大阪文化財センター）（敬称略）

凡 例

1. 遺構名は關大阪府埋蔵文化財協会の発掘調査規定に従って付した。
2. 遺物は挿図中に通し番号を付け、本文中、図版中の遺物番号と一致するようにした。
3. 層位と遺物の色調に関する記述は小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖7版』(1987)によった。
4. 標高はすべて東京湾標準潮位(T.P.)で示した。
5. 本書の遺構実測図に用いた座標値は国土座標第Ⅶ系に基づいている。また図中に示した方位は磁北である。なお真北、磁北、座標北の関係は右模式図の通りである。
6. 遺物実測図の断面は須恵器・須恵質土器は黒、瓦器・黒色土器はスクリーントーンで示し、他と区別した。



本文目次

第1章 調査経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第3節 調査方法	1
第2章 位置と環境	6
第3章 調査の成果	12
第1節 基本層序と各層出土遺物	12
第2節 第1遺構面の調査成果	14
第3節 第2遺構面の調査成果	15
第4節 第3遺構面の調査成果	18
第4章 まとめ	36
第1節 平安時代～中世	36
第2節 弥生時代中期	39
附 章 東奈良遺跡における花粉・珪藻分析	53

本文挿図目次

第1図 調査区位置図	2	第8図 周辺の遺跡分布図	7
第2図 第1遺構面調査風景	3	第9図 基本層序模式図	13
第3図 第III層掘削風景	3	第10図 第1遺構面足跡検出状態	14
第4図 第3遺構面調査風景	3	第11図 第1遺構面獣骨出土状態	14
第5図 25-〇〇調査風景	3	第12図 第II～V層出土遺物	16
第6図 大阪府位置図	4	第13図 第VI層上面、VI・VII層 出土遺物	17
第7図 地区割図	5		

第14図	Ⅷ層上面出土遺物……………18	第34図	431-O P断面……………31
第15図	Ⅷ層出土遺物……………19	第35図	405-O P、406-O O断面……………31
第16図	25-O O……………20	第36図	465-O Xと 調査区南西部断面図……………32~33
第17図	27-O O……………20	第37図	第3遺構面中央部平面図および 遺構実測図……………34
第18図	第3遺構面北西部平面図……………21	第38図	瓦器椀口径底部形態分布図……………37
第19図	25・31-O O平面・断面図……………21	第39図	各層出土土器模式図……………39
第20図	25-O O出土遺物……………21	第40図	調査区断面図……………45~46
第21図	第3遺構面北西部遺構実測図……………22	第41図	第1・2遺構面全体図……………47~48
第22図	226-O O付近平面 および遺構実測図……………23	第42図	第3遺構面全体図……………49~50
第23図	29・30-O O平面・断面図……………24	第43図	地区別弥生土器出土点数 および重量分布図……………52
第24図	29-O O出土遺物……………25	第44図	花粉分析試料採取地点……………53
第25図	30-O O出土遺物……………26	第45図	西壁南端部の花粉ダイアグラム ……………57~58
第26図	469-O O出土遺物……………26	第46図	西壁中央部の花粉ダイアグラム ……………57~58
第27図	第3遺構面北東部平面図および 遺構実測図(1)……………27	第47図	東壁中央部の花粉ダイアグラム ……………57~58
第28図	第3遺構面北東部遺構 実測図(2)……………28	第48図	西壁南端部の珪藻ダイアグラム ……………59~60
第29図	55-O S平面・断面図……………29	第49図	西壁南端部の珪藻総合 ダイアグラム……………59~60
第30図	55-O S出土遺物……………29		
第31図	その他の第3遺構面遺構 出土遺物……………29		
第32図	101-O B平面・断面図……………30		
第33図	218-O B平面・断面図……………31		

表 目 次

表 1	周辺の遺跡一覧表……………6	表 7	第 3 遺構面主要遺構 出土土器点数表……………41
表 2	層別別出土土器点数 および重量……………38	表 8	地区別弥生土器出土点数 および重量……………51
表 3	器種別弥生土器点数表(1) ……40	表 9	西壁南端部層位対照表……57~58
表 4	器種別弥生土器点数表(2) ……40		遺物観察表……………63~71
表 5	器種別弥生土器点数表(3) ……41		
表 6	器種別弥生土器点数表(4) ……41		

図 版 目 次

図版 1	第 1 遺構面全景	図版 10	(1)55-O S (2)465-O X
図版 2	(1)第 1 遺構面全景 (2)第 1 遺構面耕作痕 検出状態	図版 11	(1)101-O B (2)218-O B
図版 3	(1)第 2 遺構面畦畔 (2)第 2 遺構面畦畔	図版 12	Ⅱ・Ⅲ層出土土器
図版 4	第 3 遺構面全景	図版 13	Ⅳ~Ⅶ層出土土器
図版 5	(1)第 3 遺構面全景 (2)調査区断面	図版 14	(1)Ⅶ層上面出土土器 (2)Ⅶ層出土土器
図版 6	(1)29-O O 遺物出土状態 (2)29-O O 完掘後状態	図版 15	(1)25-O O 出土土器 (2)29-O O 出土土器
図版 7	(1)30-O O 遺物出土状態 (2)30-O O 完掘後状態	図版 16	30・469-O O、55-O S 出土土器
図版 8	(1)30-O O 断面 (2)30-O O 遺物出土状態	図版 17	出土鉄器・石器他
図版 9	(1)29・30-O O 完掘後状態 (2)第 3 遺構面中央部		

第1章 調査経過

第1節 調査に至る経緯

大阪府茨木市の南部に位置する東奈良遺跡は北摂地域を代表する拠点的弥生集落として、あるいは銅鐸鉤型の出土地として全国的に著名な遺跡である。

その規模は南北1,500m、東西800mに及び、今回の調査区はその北端部にあたる。

調査地一帯は1950年代に建設された府営住宅が広がっていたが、近年その老朽化が顕著になり、順次建替えが実施される運びとなった。

大阪府教育委員会は当地が東奈良遺跡の一角を占め、埋蔵文化財の存在が充分予想されたため、1990年10月に試掘調査を実施した。その結果、多くの地点で弥生～中世の遺構、遺物を確認し、大阪府建築部住宅建設課に発掘調査の必要性が通知された。

通知を受け、同住宅建設課は㈶大阪府埋蔵文化財協会に発掘調査の委託を行い、大阪府教育委員会の指導のもとに、同協会による発掘調査が実施されることとなった。

なお本調査の事業名は「東奈良遺跡(その1)」とし、調査対象面積は807㎡である。

第2節 調査経過

調査はその準備段階を含めて1993年11月11日に開始した。

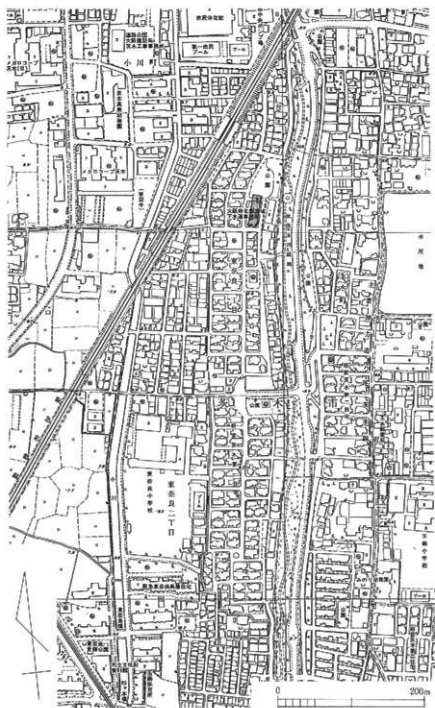
調査は試掘調査の結果から最終遺構面までの深さが3m近くに及ぶものと考えられたため、調査区の四周に鋼矢板を打ち込んだ上で地表から2m(II層途中まで)は機械で除去した。そして翌年1月半ばより人力による掘削を進め、最終遺構面の調査作業を2月末完了した。

その後ただちに埋め戻し等の作業に入り、3月25日に極寒の中4ヵ月余にわたって続けられた現地発掘調査を終了した。

第3節 調査方法

調査区の地区設定は㈶大阪府埋蔵文化財協会の『発掘調査規定』によって実施した。

それによると、東奈良遺跡は、今回の調査地も含めてその大部分が国土座標第Ⅶ座標系に基づいて表示された大阪府発行新版(1984年建設省国土地理院承認)2,500分の1地図



第1图 调查区位置图

の大J-6-13に位置している。

この地図区画をさらに12等分して1辺500mの方形区画をつくり、この各々にAからLまでの呼称を与える。ついでこの1辺500mの区画をさらに25等分し、1辺100mの方形区画に細分する。この25等分された区画には01から25までの番号を付与する。さらにこの1辺100mの方形区画を縦、横25分割の625等分にする、と、1辺4mの方形区画を得ることができる。

この1辺4mの方形区画には南北方向(縦軸)を先に、東西方向(横軸)を後にしたアルファベット(A~Y)記号2文字が呼称番号として与えられる。以上の過程を経ることによって地区割りの最小単位である1辺4mの方形区画は5桁の記号で2,500分の1地形図のどこに位置しているかが求められるわけである。さらに各最小方形区画の北西交点を同じ呼称番号で呼ぶこととする。従って各区画の北辺と西辺がそのアルファベットで呼ばれるラインとなる。

人力掘削時の包含層の遺物はこの1辺4mの方形区画を最大グリッドとして取り上げたが、遺構出土遺物などは必要に応じて遺物出土状況図等を作成した後取り上げた。なお今回の調査区はすべて大J-6-13B25に収まるため遺物観察表などでは全て最小区画アルファベット2文字だけで示した。

遺構については確認した順に01番より番号を与え、『発掘調査規定』に基づく遺構種類



第2図 第1遺構面調査風景



第3図 第III層掘削風景



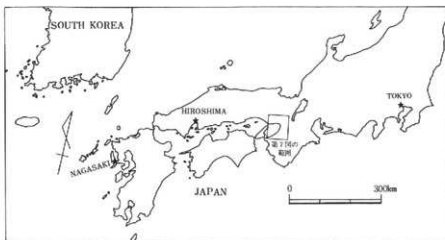
第4図 第3遺構面調査風景



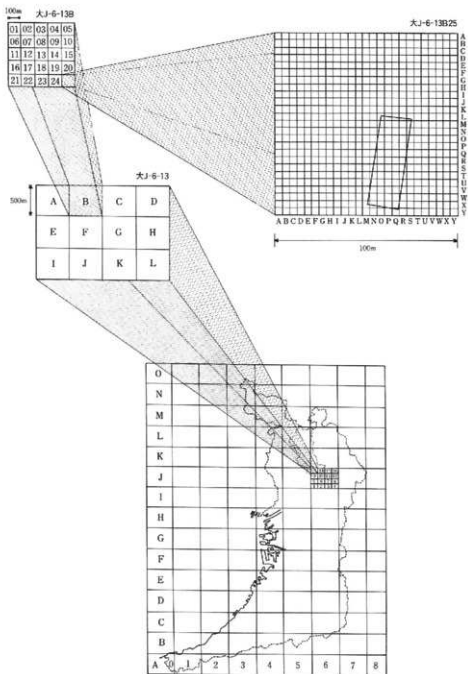
第5図 25-00調査風景

別の記号を番号に加えた（OB；掘立柱建物、OO；土坑、OP；ピット、OS；溝、OX；不明遺構）。その調査時の番号は報告書記載番号と全く一致する。

各遺構面の平面図作成は第2遺構面は手作業によったが、第1、3遺構面については航空測量を実施し、各々の図化縮尺は1/50、1/20である。



第6図 大阪府位置図



第7图 地区剖图

第2章 位置と環境

東奈良遺跡の存在する茨木市を含む大阪府北東部は俗に北摂地域と称されるが、1896年の新都区編成時の三島郡によって三島地域とも呼ばれる。この三島の呼称は律令制下の嶋上、嶋下両郡の基礎となった三嶋郡に由来する。東奈良遺跡を含む嶋下郡は現在の行政区画で言うならば茨木市、摂津市、吹田市のほぼ全域、箕面市の東端部を含む地域である。以下ではその律令制下の嶋下郡域を中心とした地域の歴史を概観する。

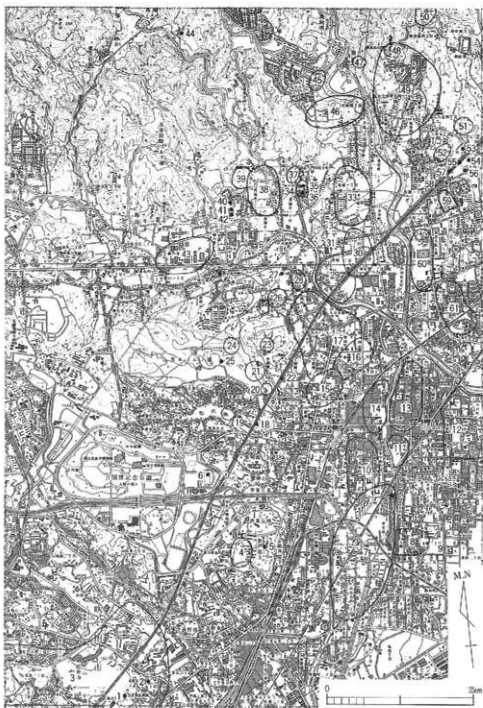
(1) 旧石器、縄紋時代

旧石器時代の遺跡は茨木市域においては太田や郡遺跡でナイフ形石器が確認されているにすぎない。吹田市域では吉志部遺跡から国府期に後続する時期のナイフ形石器が出土し注目される。

縄紋時代も草創期、早期は有舌尖頭器がわずかに箕面市粟生間谷(2点)、吉志部遺跡で確認されているにすぎず、前・中期も同様の傾向が看取され、東奈良遺跡で前期土器片、西福井遺跡で中期土器片が確認されている程度である。後期になると太田、西福井、初田、粟生間谷などの遺跡が確認され、やや集落数は増加するようである。晩期になると突帯紋

1. 吉志部瓦窯跡	21. 弁天山遺跡	42. 南塚古墳
2. 七尾瓦窯跡	22. 見付山古墳	43. 宿久庄遺跡
3. 釈迦ヶ池窯跡群	23. 上穂横山遺跡	44. クルス山中世墳墓
4. 新芦屋遺跡	24. 地蔵池南遺跡	45. 初田古墳群
5. 新芦屋古墳	25. 茨木ゴルフ場内窯跡	46. 安威古墳群
6. 山田銅鐸出土地	26. 郡山遺跡	47. 桑原古墳群
7. 東奈良遺跡(★=調査地、 * =銅鐸鋳型出土地点)	27. 茶臼塚古墳	48. 阿武山古墳
8. 玉櫛遺跡	28. 中河原遺跡	49. 塚原古墳群
9. 西方浄土寺跡	29. 五日市遺跡	50. 片ヶ谷古墳群
10. 中条小学校遺跡	30. 耳原遺跡	51. 新池塚輪窯跡
11. 新庄遺跡	31. 鼻磨古墳	52. 土室遺跡
12. 牟礼遺跡	32. 耳原古墳	53. 番山古墳
13. 茨木遺跡	33. 安威遺跡	54. 石塚古墳
14. 駅前遺跡	34. 将軍山古墳群	55. 土塚山古墳
15. 春日遺跡	35. 将軍山1号墳	56. 高樋古墳
16. 岩貫遺跡	36. 将軍山2号墳	57. 二子山古墳
17. 郡遺跡	37. 真龍寺古墳群	58. 石山古墳
18. 上寺山古墳	38. 西福井遺跡	59. 太田茶臼山古墳(現「藤体陵」)
19. 松沢池北遺跡	39. 新屋古墳群	60. 太田遺跡
20. 見付山遺跡	40. 菊山古墳	61. 総持寺下層遺跡
	41. 青松塚古墳	62. 郡山南本陣

表1 周辺の遺跡一覧表



第8図 周辺の遺跡分布図

期を中心に集落が増加し、牟礼、東奈良、耳原、七尾下層遺跡などが知られている。特に牟礼遺跡からは水田跡と井堰が検出されており、近畿の初期農耕集落として貴重である。また耳原遺跡では滋賀里Ⅲ・Ⅳ期の甕棺墓群を確認している。

(2) 弥生時代

弥生時代になると茨木市域を中心に集落は爆発的に増加する。まず前期には東奈良、牟礼、耳原、郡・倍賀、目垣の諸集落が成立する。中でも東奈良遺跡は嶋上郡城(高槻市)に存在する安満遺跡とともに三嶋地域の拠点集落としてその後も展開していく。その後Ⅱ様式期には中河原遺跡、Ⅲ・Ⅳ様式期には太田、中条、春日などの諸遺跡が出現し、多少の盛衰はあるものの集落は着実に増加する。さらに後期は宿久庄、安威、総持寺などの諸遺跡が出現し、集落が従来の枠を破って河川の上流や千里丘陵の小谷部などにも広がっていったことが看取される。

ただ吹田市域は開発がかなり遅れたようで千里丘陵上の中期～後期の新芦屋遺跡(中期後半～後期)や南部沖積平野部の都呂須遺跡(中期)など、数カ所の集落が知られる程度である。

東奈良遺跡についてさらに触れると、まず前期は周囲に環濠を巡らす二つの集落と方形周溝墓群が出現し、中期には環濠は埋まるものの前期の集落と重なりつつ集落は拡大し、今回の調査区のように遺跡範囲の北端部、あるいは南端付近にも集落が出現する。そしてその集落の間を埋めるかのように多量の方形周溝墓も確認されている。後期になっても遺跡は存続し、特にその後半から庄内期にかけては幅7mの用水路や土坑墓群が確認されている。安満遺跡が弥生時代中期で衰退するのに比べて東奈良遺跡が引き続き拠点集落地位を保っていることは注目すべきであろう。

また詳細な時期は不明であるが銅鐃、銅戈、ガラス勾玉の鈎型、小形仿製鏡、銅鐃形土製品など注目すべき遺物も出土している。特に銅鐃鈎型は香川県我拝師山出土銅鐃、豊中市桜塚出土銅鐃、兵庫県気比3号銅鐃の鈎型を含んでいることが判明している。なお東奈良遺跡の東方1,500mの吹田市山田から外縁付鈕式4区装裱紋銅鐃が出土しており、同遺跡で铸造された可能性も考慮すべきであろう。

(3) 古墳時代

古墳時代前期は西から紫金山、將軍山、安威0・1号墳と水系を異にする古墳が丘陵の突端に相前後して築造される。中期になると安威川の東岸、土室の地に石山、土保山、香山といった中小の古墳が確認されている。吹田市岸辺からも円筒埴輪片が出土しており、

同時期の古墳のあったことは間違いない。

これらの古墳群と相前後する時期に突如として全長226mの太田茶臼山古墳(現「継体陵」)が出現するが、その基盤はおよそ在地勢力とは考えられず、畿内政権中枢部の政変と結んで考えるのが妥当であろう。そして、後期になるとその東方、高槻市郡家新町に真の継体天皇陵であることがほぼ確実視される今城塚古墳が出現する。

茨木市域においても今城塚古墳とはほぼ同じ頃、2基の石棺と馬具を出土した前方後円墳南塚古墳が出現する。さらに後期後半には新屋古墳群などの群集墳が出現するが、その他にも石棺を有する耳原古墳、海北塚などの横穴式石室墳も点在する。また現在の吹田市域には千里須恵器窯跡群(吹田地区)が出現しその上限は5世紀に遡るが最盛期は6世紀の後半代であり、単なる一地方窯としての性格を超えた操業が考えられる。その周辺に分布する上寺山、新芦屋などの古墳はいわゆるカマド塚で、当然それらの須恵器窯との関係を考慮すべきであろう。なお茨木市山手台に存在した初田1・2号墳は終末期の横穴式石室と考えられる。

このような考古学上の成果のみならず文献の上からも三嶋県主(高槻市弁天山古墳群がその墳墓と考えられる。)、竹村屯倉(茨木市桑原・耳原に比定)の存在が確認され、畿内政権が在地勢力をより直接掌握しようとしていた状況を垣間見ることができる。

東奈良遺跡はなおしばらく集落が存続する。しかし古墳時代中期以後は衰退し、奈良～平安時代にかけてもわずかに獨立柱建物が検出される程度であり、再びその地が集落として利用されるのは現代まで待たねばならなかったようである。

(4) 律令期～王朝国家期

7世紀後半以降、日本は国家成立に向けて大きく動きだす。先述したように現在の茨木市域は4郷からなる嶋下郡に編成され、その郡衙はその地名より東奈良遺跡から北東3kmの茨木市郡にあったものと考えられる。そのことはその北方に旧山陽道が東西に走っていることから裏付けられよう。同時に在地の勢力による寺院建立も盛んとなり、茨木市域には三宅庵寺、太田庵寺、穂積庵寺が確認されている。

なお前代に一大窯業生産の地であった千里丘陵においては難波宮の瓦を焼いた七尾瓦窯や初期の平安京の瓦を焼いた紫金山瓦窯が知られている。また国家の馬を養育した六カ所の近都牧の一つ、鳥養牧が現在の摂津市付近に設置されている。

その後律令国家は10世紀初頭を大きな画期として大きく変質する。嶋下郡において摂関家の所領が増大するものもこの時期以降である。特に著名なものは嶋下郡から豊島郡にかけ

ての千里丘陵一帯に存在した垂水御牧で、嶋下郡はその東牧を形成していた。この荘園は文字通り当初は現在の吹田市垂水町付近に存在した摂関家の牧場を基礎にしたものであったが、次第にその周辺の農民を点的に支配するようになっていった。

(5) 中世

摂関家の荘園は垂水御牧の他にも福井庄、安井(安威)庄、沢良宜庄などがあり、東奈良遺跡に東接する玉櫛の地も同家の所領であったようである。ただ院勢力の強大化や中央の争乱などは権門としての摂関家の地位の低下を招き、それらの所領は近衛家あるいは春日社領、ひいては興福寺領へと変化していく。特に春日社は用水管理など村落共同体的規制を利用すると同時に各地に末社を設け、農民の精神的支配も強めた。茨木市内に春日神社が多いのはその名残である。なお現在の茨木市目垣付近には院領(長講寺領)であった溝坑庄が存在した。

鎌倉時代後半以後、農業生産力が高まり、余剰生産物の増大は農民層の自立の条件を整えると同時にその新たな得点をめぐって領主支配の再編、重層化を促した。勝尾寺が嶋下郡内の得点を集積し、その勢力を拡大したのもこの時期である。またやや遅れて守護細川氏もこの時期在地に成長しつつあった国人茨木氏や吹田氏などを組織しはじめる。ただ嶋下郡においては農民の惣的結合の強固なことも手伝って、戦国時代に突入しても国人層や戦国大名の一門の支配が確立せず、その支配の安定化は織豊政権の成立を待たねばならなかった。

(6) 近世

豊臣秀吉の天下統一後、嶋下郡においても検地、刀狩りが実施され、兵農分離が徹底していく。そして江戸開府後、嶋下郡域はその北部山間部が高槻藩永井氏の所領となった他は天領、旗本領あるいは幕府の要職にあった大名領でそのほとんどが占められた。特に西国街道沿いの地域にその傾向が顕著である。

また郡内を横断する西国街道は当時の主要交通路として機能したが、諸国の物資が海路大坂に運ばれるようになる初期の経済的機能を失い、18世紀には参勤交代の専用路の感を呈するようになる。茨木市内には諸大名の宿泊地となった郡山宿本陣(藩の本陣)が現存する。また郡の南部は広範な淀川の湿地帯が広がっていたが、吹田村などはその水運によって開けた在郷の町屋として発展した。

なお茨木市北部山間部の千提寺、下音羽などの諸村は戦国時代キリシタン大名高山右近(高槻城主)の所領であったこともあり、切支丹禁令後も信仰を守り続けた隠れ切支丹の地

として著名である。

(7) 近現代

1896年、嶋下郡と嶋上郡は三島郡に統合され、1940年に吹田市、48年に茨木市がいずれも周辺の町村と合併して誕生した。さらに1966年には三島町が市制を施行し摂津市となり、現在の行政区画が完成した。

近現代の嶋下郡域も京都と大阪を結ぶ交通の要衝として発展し、特に1876年の東海道線の開通、1928年の新京阪鉄道(現阪急京都線)の開通は大きな役割を果たした。その後1961年から始まった千里ニュータウンの造成、あるいは70年の万国博の開催を機に新たな交通網の整備が進められ、一面に竹藪の広がっていた千里丘陵は大阪市の一大ベッドタウンとしてその姿を一変した。

第3章 調査の成果

第1節 基本層序と各層出土遺物

今回の調査区の堆積状況は近年の盛土を除くと最深の遺物包含層と考えられる黒色粘土までで8層に大別できる。調査ではⅡ層の途中まで重機で掘削し、以下を人力によって掘り下げていった。重機掘削部は長期間残すと崩壊の恐れもあったため、北壁のみ一時的に残し断面観察を行った。なお現地表面のレベルは約8.5mで最終遺構面では北部で5.6m、南端部で5.1mを測る。以下上層から順を追って各層の概略を述べていく。(第9図)

第Ⅰ層 緑灰色から灰オリーブ色の砂質土からなる中世後半～近代の耕作土と考えられる層を一括して第Ⅰ層とした。厚さ1.0～1.1mを測り、遺物は土師質土器の細片が若干出土したにとどまる。明確な洪水層と見られる層は認められず、安定した堆積を重ねた層である。

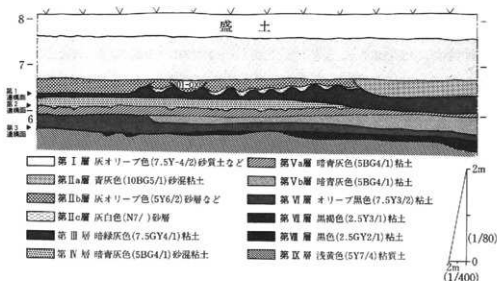
第Ⅱ層 灰色系の砂、粘土、シルトの互層で度重なる洪水のあったことを明確に示しており、第Ⅰ遺構面の耕作痕を完全に覆いつくしている。南西部にのみ認められた青灰色砂混粘土をa層、第Ⅰ遺構面の畑の畦を薄く覆う灰色砂をc層、その間の灰オリーブ砂を中心とする層をb層としたが、何分その多くは重機掘削によったため便宜的なものにならざるを得なかった。厚さは約0.6mを測り、b層を中心に磁器、瓦器、土師器などの細片が出土している。

第Ⅲ層 暗緑灰色粘土で調査区全面に厚さ25cm程堆積する。その上面には第Ⅰ遺構面の畑の畦跡が確認された。磁器、瓦器、土師器皿などの細片が出土している。

第Ⅳ層 砂と粘土が複雑に堆積する洪水層で、暗青灰色砂混粘土で一括した。南東部を除く調査区のはほぼ全面に認められ、第Ⅱ遺構面の水田跡を覆う。厚さは15～40cmを測り、瓦器、土師器皿などの細片が少量出土している。

第Ⅴ層 暗青灰色粘土層で、厚さ25～50cmを測る。調査区全面を覆うa層と調査区南東部で確認したb層に大別できる。b層は第Ⅵ層を切り込む形で存在する層で、植物遺体と見られるオレンジ色の縦位ラインが認められる点でa層と区別できた。瓦器、土師器、弥生土器などが出土している。

第Ⅵ層 オリーブ黒色粘土で調査区全面に厚さ20～40cmで存在する安定した層である。



第9図 基本層序模式図（調査区東壁 一部加筆）

瓦器、須恵器、弥生土器などが出土している。

第VII層 黒褐色粘土で調査区の西部で確認した。最も厚い南西部では30cmを測り、砂質の強弱でa、bの2層に峻別できた。黒色土器片が出土している。

第VIII層 黒色粘土で、地勢の低くなる調査区南部では厚さ20cmを測るが、北部に向かうにつれて浅くなり、北東部ではまったく認められない部分も多い。ただVI層との境界付近は両層が複雑に交錯する状態が看取され、VI層形成時に大きく攪乱、削平されたようである。多量の弥生土器と若干の須恵器が出土した。

第IX層 第3遺構面のベース土を形成する浅黄色粘質土で、その上部10cm余は第VIII層の影響を受け、黒く変色する。遺物はまったく出土しなかった。

第2節 第1遺構面の調査成果

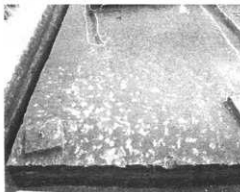
今回の調査では基本的には3面の遺構面を確認し、上面から順に番号をふった。詳細な時期の検討は次節に譲るが、大きく言って第1・2遺構面は中世前半、第3遺構面は弥生中期である。ただ詳細に調査する余裕がなかったが、第II層中、あるいはIV層上面においても人間の足跡や耕作痕を部分的に確認している。

第1遺構面は前述したように第III層上面で確認した遺構面である。(第41図)

01-OX 第1遺構面精査時に確認した道路と考えられる遺構であるが、断面観察によるとその切り込み面は第II層中であり、今回検出した諸遺構の中で最も新しい。調査区の中央ではほぼ南北に主軸をとって長さ21m、幅6.5mにわたって延び、その北端で90°東におれ、調査区外に延びていく。屈曲後の幅は5mで、長さは12m以上である。屈曲部の北西肩部は明確ではなく、南部はII a層に切られて調査区南端から8m以南では確認できなかった。埋土は暗青灰色粘質土で、陶器、瓦器、瓦質土器、土師器皿などの細片が出土した。また浅い筋状の溝が南北主軸に沿って認められ、さほど明確ではなかったものの、轍の痕跡と考えてよいだろう。

畑跡 調査区全面に20条にわたって断面蒲鉾状の畑の畦を確認した。その方向はほぼ東西であるが、わずかに北西-南東方向に振る。調査区中央では畦間の溝底レベルから15~25cmの高さで残っていたが、北部と南部では高まりは明確ではなく、平坦面に溝が残っていたに過ぎない。要因としてはII層堆積時の削平が考えられ、特に南部はII a層に明確に切られていた。またTQ区の畦直上から獣骨(馬の上顎骨)が出土している。

さらに詳細に観察すると北端部とそれ以南では畦の様子が少し違うことがわかる。まず各畦間の距離は北端部2条の場合3.5mと、それ以南(2.3m)と比べかなり広い。また北



第10図 第1遺構面足跡検出状態



第11図 第1遺構面獣骨出土状態

西隅部の溝の認められない平坦面は、南接する溝の底部のレベルがその平坦面より低いことから考えて当初から畦がなかったと見られ、そこに人間、牛の足跡が集中している。ただ埋土にはまったく差がなかった。

足跡列 北西端部と南端部に認められ、いずれも人間と牛のものである。前者はあたかも畑の畦を避けるかのように北から入って西に抜ける状態が観察され、一部では歩行列も認められた。後者は畦間の溝に沿うように東西方向に認められたが、北西部ほど明確ではない。またその足跡の見られた部分が畦の存在しない部分であることから考えて、畦が削平された後のものである可能性が高い。

第3節 第2遺構面の調査成果

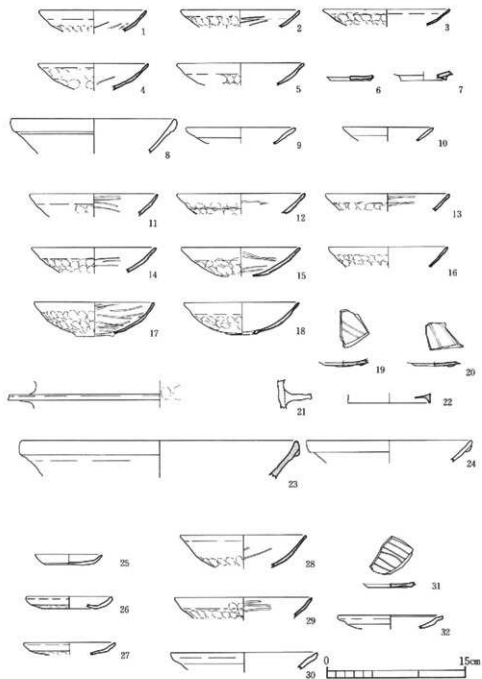
第2遺構面はV層上面で確認した中世の遺構面である。(第41図)

水田跡 調査区を南北に縦断する1条の畦畔を確認し、水田跡であることが判明した。ただ調査時の不注意で調査区北半ではIV層掘削時に畦畔を削平してしまい、詳細な調査ができなくなったが、幸いにも畦畔のあったと考えられる部分の遺構面が若干赤く変色しており、ほぼ全体像を復元することができた。

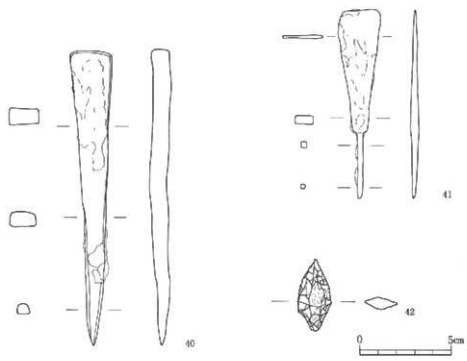
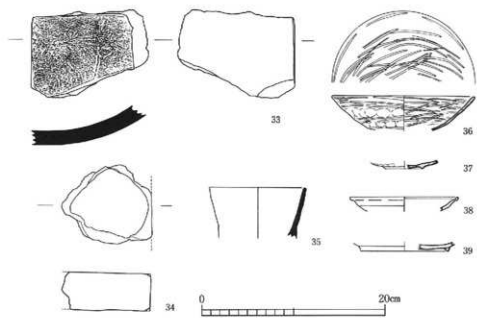
畦畔は調査区中央に幅80cmで走り、その方向はまったく真北に一致する。ただ調査区北壁から3mの地点で二股に分かれるように赤い変色が認められ、畦畔の本米の形態を反映するものと考えられる。

遺構面が北部はほぼ平坦であるのに比べて南部は全体として南西に落ち込み、調査区南壁付近では東西のレベル差がおおよそ15cmにも達している。したがって畦畔は調査区南東部に水田を設けるための保水を意図したものとも考えられる。畦畔の幅が北半部に比べて南半部は広く、より強固な畦畔の築造を想定していたものと考えられること、畦畔を境に水田面に数cmのレベル差があることなどはその想定を補強する。

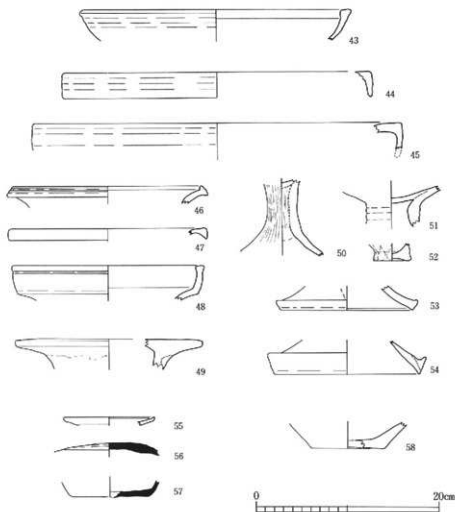
水田面には灰白色砂や灰オリーブ色粗砂を埋土とする無数の足跡が見られ、特にVO区付近では畦畔に沿って歩く状態が看取された。また畦畔を除く水田面は概して柔らかく、調査時に歩いてもやや沈むほどであった。なお南壁から5mの畦畔上で長さ60cm、幅20cmの水口を確認した。



第12図 第II～V層出土遺物



第13图 第VI层上面、VI·VII层出土遗物

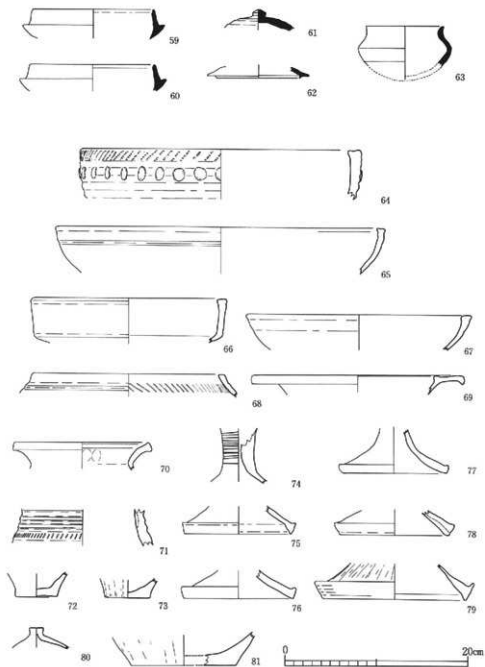


第14図 VIII層上面出土遺物

第4節 第3遺構面の調査成果

V～VII層中では各層から少量ながら遺物が出土したもののまったく遺構は確認できなかった。いずれも粘土層で、洪水層などはまったく見られず、比較的安定した堆積が続いたものと見られる。

次に明確な生活面を確認したのはVIII層の黒色粘土を除去した段階、つまりIX層の上面であり、これを第3遺構面と名付けた。前述したようにVIII層からは弥生時代中期から古墳時代後期までの遺物が出土し、比較的長期間にわたって堆積した層であると見られるが、第



第15圖 VII層出土遺物

3遺構面で確認した人為的な遺構は弥生時代中期後半のものに限られる。(第42図)

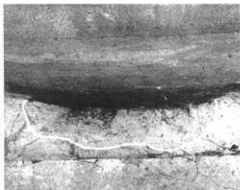
第3遺構面で確認した遺構はその埋土から次の5種類に大別できる。

1. 黒色粘土 (N2/) を埋土とするもの
2. 黒色粘土 (2.5GY2/1) を埋土とするもの 1に比べかなり淡い
3. 灰褐色粘土 (7.5YR4/2) を埋土とするもの
4. 黒色粘土上に浅黄色粘質土 (Ⅸ層土) の堆積するもの
5. 黒色粘土と灰色粘土の厚い互層を埋土とするもの 465-O Xのみ

第42図を見て明らかのように弥生土器の出土する遺構はほぼ1に限られる。規模の点から見ても深さ20cmを越えるしっかりしたものはほとんどが1であり、2、3はいずれも浅いシミ状のものが多く、1よりも古いものに限られる。したがって第3遺構面における人為的な遺構は1に限られ、2、3より以前に自然の作用によって形成されたものと判断してよいだろう。1の分布が調査区の北部に限られ、地区別に見たⅧ層中の弥生土器の出土数と相関関係を示していることから裏付けられよう。(第43図)

なお4は後述するように風倒木の可能性が考えられ、5は弥生時代中期以前の自然の溝であろう。以下では1を中心に記述していく。

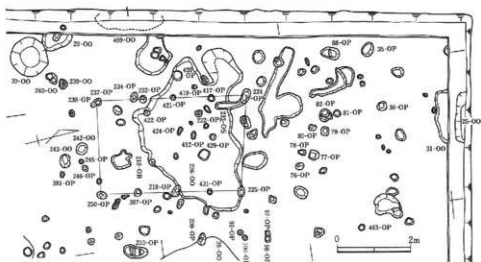
25-O O LP区の北壁トレンチ掘削時に確認した土坑で、土坑北半部が調査区外に延びるため全容は把握できなかったが、東西2m、南北1m、深さ0.5mほどの楕円形の土坑と考えられ、壁面および底面はかなり凹凸が激しい。埋土は漆黒色気味の黒色粘土で、その上半部から多量の弥生土器が出土した。その量は189点、2,450gにおよび、いずれも今回の調査区で検出した遺構の中では30-O Oに次ぐ量である。器種も広口壺5点、甕数点、大形甕3点、高杯1点と多岐にわたるが、いずれも小片である。なお無紋土器系の可能性のある土器が1点(82)出土している。(第16・19・20図)



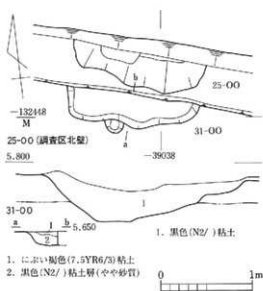
第16図 25-O O



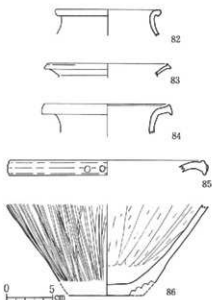
第17図 27-O O



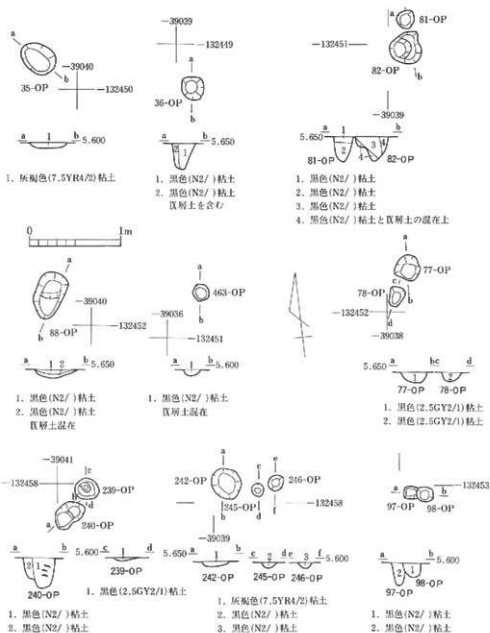
第18図 第3遺構面北西部平面図



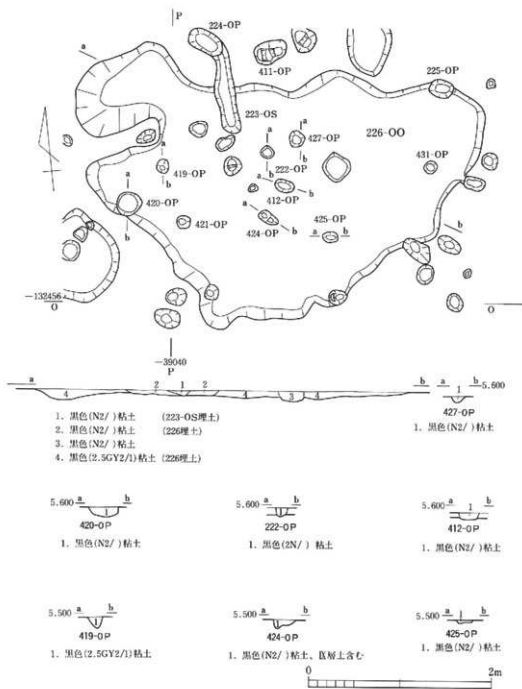
第19図 25・31-00平面・断面図



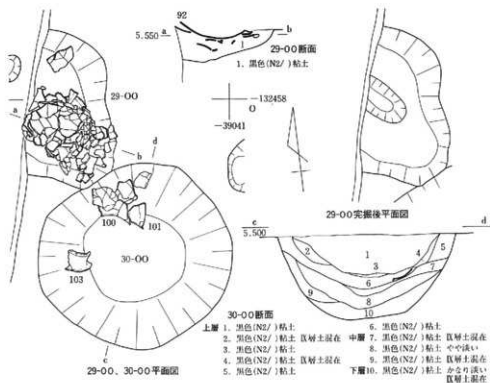
第20図 25-00出土遺物



第21図 第3遺構面北西部遺構実測図



第22図 226-00付近平面および遺構実測図

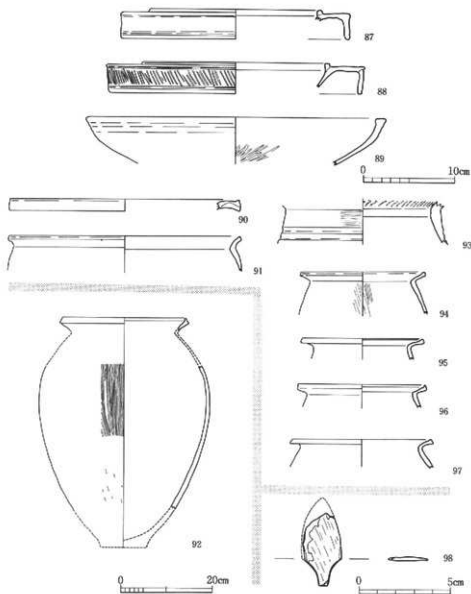


第23図 29・30-00平面・断面図

遺構の性格は土器の廃棄に関わるものと考えられるが、他の同様の性格を有すると見られる29・30-00などに比べ、凹凸が激しくかなり急峻な感を呈していること、無紋土器系の土器が出土していることなど、やや趣の異なる点があるのも事実である。

29-00 00区で検出した土坑である。検出時の規模は、南北長80cm、東西長40cm、深さ20cmを測るが、その西端部をトレンチ設定時に一部掘削してしまったこと、遺物が検出面（Ⅸ層上面）より高いレベルからも出土していることから推して、本来は黒色粘土層から切り込む、南北90cm、東西70cm、深さ25cmほどの方形の土坑と考えられる。なお底部は中央がややくぼんでいるため二段掘り状を呈している。

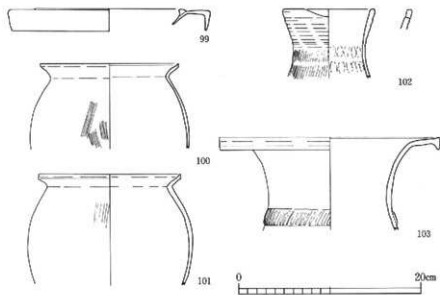
土坑のやや北よりで北西-南東に主軸をとる大形甕が横になった状態で出土した。甕の内部にはⅨ層の浅黄色粘質土が充填し、当初甕棺墓の可能性も考えたが、底部から10cm余り浮いており、その間の黒色粘土からも甕や高杯片が出土していること、上半部の破片が確認できなかったことなどから見て、29-00の性格は土器の一括廃棄遺構と考えたほうがよさそうである。なお底部付近から磨製石鏃が1点出土している。(第23・24図)



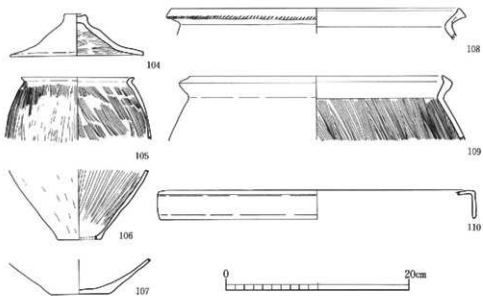
第24図 29-00出土遺物

30-00 00区、29-00の南東で検出した円形の土坑で、直径1.0m、深さ55cmを測る。一部29-00と接するが新旧関係は明確にできなかった。埋土は黒色粘土がレンズ状に堆積しており、上・中・下層に大別できる。上層と中層の間には薄い植物遺体層が認められ、下層はベースのⅡ層土の混在が相対的に多い層である。

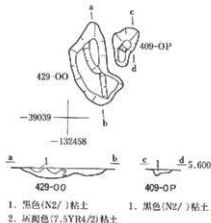
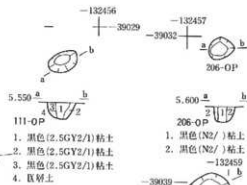
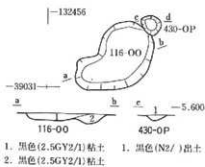
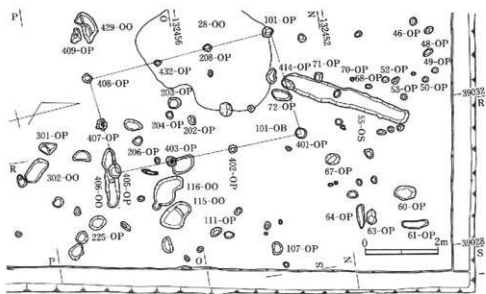
遺物の中・下層からも若干土器片が確認されたが、大半は上層から出土している。その



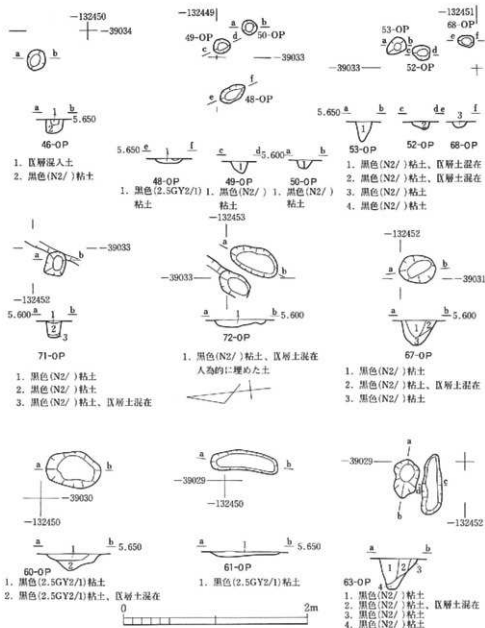
第25圖 30-〇〇出土遺物



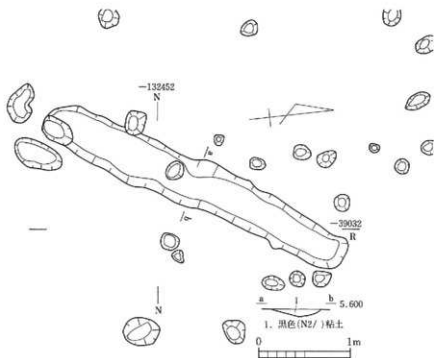
第26圖 469-〇〇出土遺物



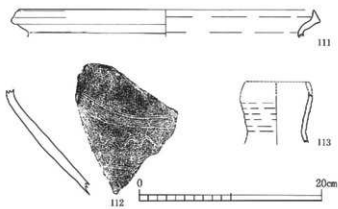
第27図 第3遺構面北東部平面図および遺構実測図(1)



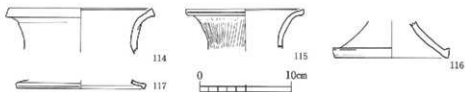
第28圖 第3遺構面北東部遺構実測圖(2)



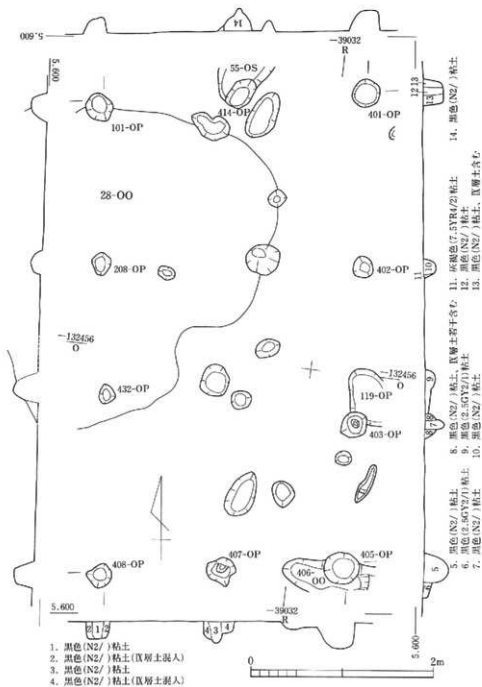
第29図 55-O S平面・断面図



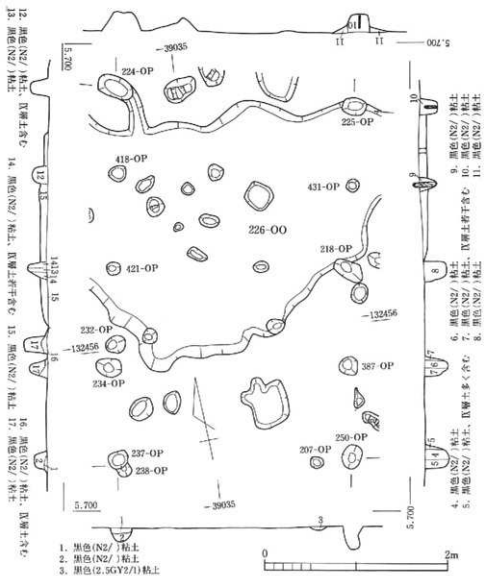
第30図 55-O 出土遺物



第31図 その他の第3遺構面遺構出土遺物



第32图 101-O B平面·断面图



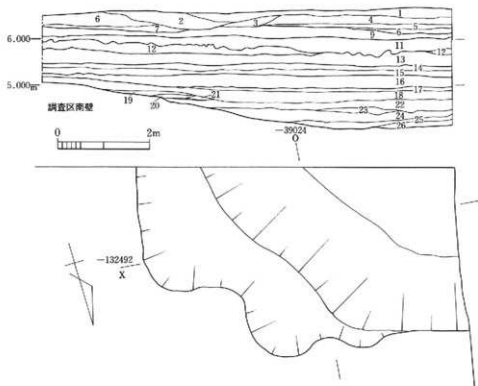
第33图 218-OB平面·断面图



第34图 431-OP断面



第35图 405-OP、406-OO断面



第36図 465-OXと

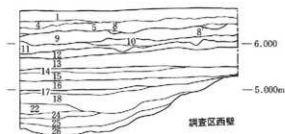
量は点数で337点、重さで3,150gといずれも今回の調査で検出した遺構中では最高であり、器種別には甕数点、鉢3点、広口壺・高杯各2点、短頸壺（水差？）1点を確認できた。ただその多くは小片で、完形に復元できるものは皆無だった。

以上のような堆積状況、あるいは遺物の出土状況から考えて30-OOは土器の廃棄遺構と考えられる。(第23・25図)

31-OO 25-OOのすぐ南で確認した東西に長い土坑で、北部は北壁トレンチ設定時に破壊してしまったが本来の規模は東西1.5m、南北0.8m程であったと考えられる。当初25-OOと一連のものか考えたが、埋土の状況や深さが違い、別の遺構と判断した。埋土から若干の弥生土器が出土している。(第19図)

55-OS MQ、NQ区で検出した溝で、北北東-南南西方向に延び、幅0.5m、長さ3.6m、深さ5cmを測る。埋土から若干の弥生土器が出土した。414-OPとの切り合いから、101-OBより古いことが判明した。(第29・30図)

469-OO OO区の29・30-OOの北方で確認した土坑である。ただこの遺構は西壁



第IIa層 1. 青灰色(10BG5/1)砂混粘土

2. 青灰色(10BG5/1)砂混粘土

3. 青灰色(5BG5/1)砂

4. 青灰色(5BG5/1)と

灰色粗砂(7.5Y6/1)の互層

5. 青灰色(10BG5/1)砂混粘土

6. 暗青灰色(5BG4/1)砂混粘土

7. 灰オリーブ(N7/)粗砂

第IIc層 8. 灰色(N7/)砂

第III層 9. 暗緑灰色(10G4/1)粘土(やや砂質)

第IV層 10. 暗青灰色(5BG4/1)砂混粘土

11. 暗青灰色(5BG4/1)砂混粘土

(灰オリーブ(5Y5/3)砂を間層として含む。)

第V層 12. 暗青灰色(5BG4/1)粘土

第VI層 13. オリーブ黒色(7.5Y3/2)粘土

第VIIa層 14. 黒褐色(2.5Y3/1)粘土

第VIIb層 15. 黒褐色(2.5Y3/1)粘土(やや砂質)

第VIII層 16. 黒色(2.5GY2/1)

465-OX埋土

17. 灰色(5Y5/1)粘土

18. 黒色(2.5GY2/1)粘土

19. 灰色(N4/)粘土

20. 灰色(N4/)粘土(かなり薄い)

21. 灰色(5Y5/1)粘土

22. 灰色(5Y5/1)粘土(17より粘性強い)

23. 灰色(5Y5/1)砂混粘土

24. 暗灰色(2.5Y5/2)砂

25. 暗灰色(N3/)粘土

26. 灰色(5Y6/1)砂混粘土

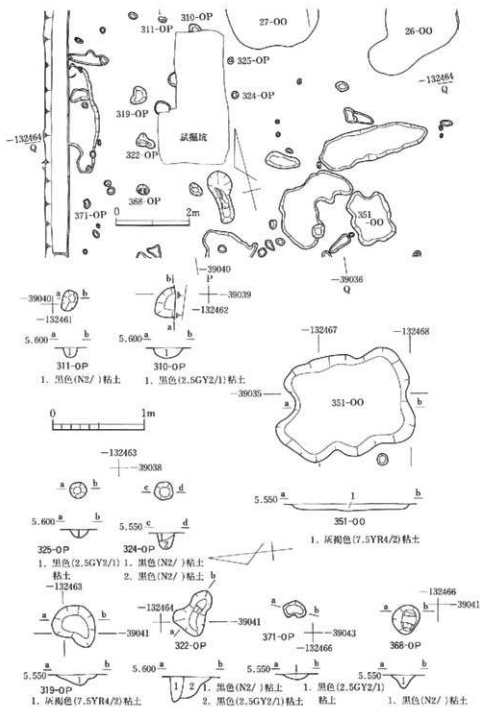
調査区南西部断面図

トレンチ設定時に破壊してしまい、結局、ほぼ調査区断面でのみの調査となってしまったが、長さ1.8m、幅数10cm、深さ10cmほどの南北に長い、浅い溝状の土坑であったようである。ただ遺構周辺は弥生時代の包含層である黒色粘土が認められず、おそらく遺構上半部とともに削平されたとみられることから、本来はもう少し規模は大きかったと思われる。

埋土からは壺数点、大形壺2～3点、高杯2点、甕用蓋1点が一括して出土したが、いずれも小片で、完形に復元できるものはなかった。また壺は1点も出土しなかった。遺構の性格は29・30-OO同様、土器の廃棄遺構と考えるのが妥当であろう。(第26図)

101-OB NQ～OR区で検出した3間×2間の掘立柱建物で、主軸をほぼ南北にとり、その規模は南北5.1m、東西2.7mを測る。柱穴は直径30cm、深さ15～25cm程の円形で、直径10cmの柱痕を確認したものもある。(第32・35図)

218-OB NP～OP区で確認した4間×1間の掘立柱建物で、主軸は真北よりやや東よりにとる。規模は南北3.8～4.1m、東西2.6mを測り、柱穴は直径20～25cm、深さ20cmのほぼ円形で、225・431-OPに残った柱材その他から柱の直径は10cmと考えられる。



第37図 第3遺構面中央部平面図および遺構実測図

(第33・34図)

なお、218-OBと31-OOの間でも深さ20cmを越える柱穴状のピット(81・82-OP、36-OP)を確認し、建物の可能性を想定して調査を進めたが、プラン等の確定までには至らなかった。(第18図)

26~28・468-OO 26~28-OOは直径約3m、深さ70cm程の不定形な土坑で、断面の観察から遊離した状態の第IX層土の下に漆黒色気味の黒色粘土が潜り込む状況が確認された。遺物が出土しないため人為的なものとは考えられず、当初その性格を図りかねたが、その遊離したIX層土を樹木の根によって引き上げられたものと見て、風倒木痕の存在を想定した。468-OOも規模がやや大きいと同様に考えてよいだろう。これらの時期は切り合いから見て弥生時代中期以前である。(第17図)

465-OX 調査区の南西端部で検出した溝で、検出長7m、深さ1mを測り、埋土は黒色粘土や灰色粘土が厚く堆積していた。VIII層がその上面を覆うため弥生時代中期以前であることは間違いないが、遺物がまったく出土していないため、考古学的にはその時期を特定することができなかった。ただ後述する花粉分析の結果から最下層の第36図26層は6,500B.P以前、17~25層は縄紋時代前~中期の可能性が指摘されている。したがってこの溝は縄紋時代に存在した自然の谷状地形の一角である可能性が高い。また上部に厚く堆積する黒色粘土(第36図18層)は南壁断面全体で確認でき、特にやや落ち込んでいく南東端部では厚さ40cmを測る。(第40図30~31層)

第4章 ま と め

第1節 平安時代～中世

(1) 時期

今回の調査では第II層を除くと遺物の出土量は少なく、一括性の高い資料にも恵まれなかったためその時期決定はかなり困難を極めた。

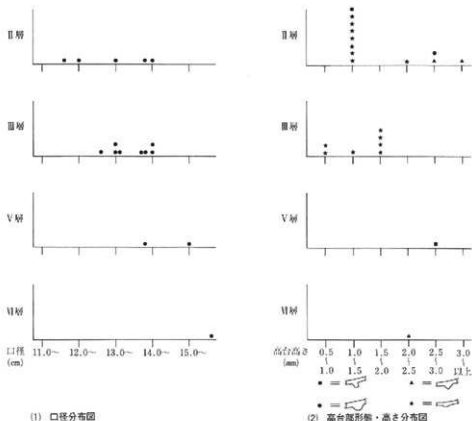
ただ幸いなことにII～VIの各層から一定量の瓦器碗が出土しており、時期決定の鍵になるものと考えた。しかし何分にも包含層内の遺物であるため先行する時代の混入などを考慮するならば一定の前提作業、つまり各層の堆積時期を示す個体の抽出が必要である。そこでまず各層出土の瓦器の口径を表してみたところ、今回出土した瓦器の口径が時期が新しくなるにつれて順次縮小していくことを如実に表すことができた。特に第III層出土のもの13～14cmに集中しており、かなり同時期性の高い遺物と言えるであろう。

底部形態を見ても同様で、第V、VI層出土のものは高台が断面方形、三角形で比較的しっかりしているが、III、IV層と新しくなるにつれて扁平になり、およそ高台の用をなさない高さ1mm前後のものも出現する。しかし確実に高台のつかない個体も確認できなかった。ただII層は他層に比べてバラつきが大きく、先行する時期の遺物がかなり混入していることは明らかである。II層が砂層を中心とした洪水層であることを考えるならば当然と言えるだろう。(第38図)

総じて言うならばII層を除く各層出土の瓦器は各々の層の堆積時期をかなり正確に示していると考えてよさそうである。またそれらの層では直径12cmを下まわる個体はまったく出土していない。したがってII層中の直径12cm以下の個体はその堆積時期の一端を示していると考えて大過ないであろう。

以上の点を踏まえた上で、他種の土器も考慮して、瓦器の型式変遷を基にして各層、遺構面の時期を明らかにしていきたい。なお今回出土した瓦器は和泉型に限られ、南河内地域を中心としたものではあるが尾上実氏の編年をもとに論を進める。¹³⁾

第VI層から出土した36はまだ外面に暗紋がかなり密に残っており、尾上編年の12世紀を中心としたII期に遡ることはまちがいない。摩滅が少なく、全体の1/5がまとまって出土していることから他からの混入は考え難く、第VI層の堆積時期の1点を示すものと考えて



第38図 瓦器碗口径底部形態分布図

よいだろう。ただ37のようにIII期まで下ると見られる底部や11世紀にその中心を置く38のような土師器皿も出土しており、ここでは第VI層の堆積時期を12世紀から13世紀初頭に置き、11世紀に遡る可能性も指摘しておきたい。

第II～V層から出土した瓦器はいずれも外面の暗紋はすでに見られず、尾上編年のIII-3期以降の特徴を示している。ただ先述したように確実に高台の消失した個体が認められないことからIV-2期には下らないと見られる。また第III層には17のようにまだ見込みに平行暗紋の残るものが確認され、IV-1期には下らないであろう。したがってIII～V層の堆積時期は尾上編年のIII期と見てよく、II層はIV-1期に下る可能性もあることを指摘しておく。実年代で言うところ各層とも13世紀中でとらえることができる。

ただここで注意しておかねばならないことは、尾上編年ではIII-3、IV-1期の口径を各々13.9～14.6cm、13.2～14.0cmとしており、今回の成果よりかなり大きい値を示してい

層位	土器	陶器	瓦質土器	瓦器	須恵質土器	須恵器	皿	土師器	土師器以外	土師器	黒色土器	弥生土器	遺構面
II	7		5	90	3	19	154	11				69	第1遺構面
	208		134	338	68	149	331	228				372	
III	1			56		1	58	3	2			7	第2遺構面
	9			277		25	182	75	3			42	
IV			1	16			23	1	1			10	第2遺構面
			25	45			71	9	1			34	
V			2	18		1	30	5				78	第2遺構面
			49	65		4	108	29				406	
VI				5	1	7	13	4	1			574	第2遺構面
				78	228	116	33	95	1			4,505	
VII 上面												11	第2遺構面
				4		17	12					178	
VIII 上面				4		17	12					2,572	第2遺構面
				13		239	37					23,770	
IX 上面						11						2,117	第3遺構面
						134						21,985	
IX 上面												1,250	第3遺構面
遺構												10,665	

注1) II層には01-OX出土遺物を含む。

3) 上段が点数、下段が重量(9)

2) 瓦質土器、須恵質土器は鉢等大形器種をさす。

表2 層別出土土器点数および重量

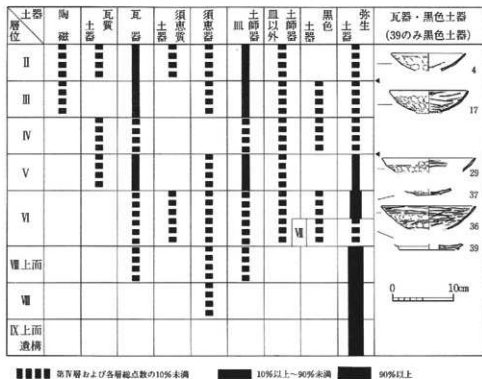
ることである。今回検出した資料の数値は東接する高槻市内の資料をもとに橋本久氏が発表された楠葉型の瓦器編年とむしろよく合致する。²⁾今後和泉型瓦器の地域色を解明していく上で留意すべき点であろう。

また第Ⅷ層からは瓦器はまったく出土しなかった一方、黒色土器が1点出土していることから平安時代前半の可能性が想定できる。

以上のことから第1遺構面を13世紀後半から末、第2遺構面を同前半に想定することができる。

(2) 性格

各層、遺構面の年代がほぼ明らかになった上で、今回の調査区の平安時代以降の土地利用の変遷につれて若干触れておくならば、第1、第2遺構面いずれも耕作痕が確認されていること、Ⅷ層上面(Ⅷ層中)から馬鍬の歯が出土していることから見て、一貫して耕作



第39図 各層出土土器模式図

地として利用されていたことが推測され、そのことは花粉分析の結果からも裏付けられよう。さらに北壁断面の様子から察すると中世後半以降、近現代まではほぼ安定した自然堆積を想定することができるが、II、IV層の存在は中世前半に最低2回の大規模な洪水のあったことを示しており、13世紀頃、付近の農耕をめぐる環境が不安定であったことが推測される。また第1遺構面で畑跡を確認したが、ベースの第III層上部から多量のイネ科の花粉を検出しており、陸稲の栽培あるいは第1遺構面が一時期水田であった可能性も考慮する必要がある。

第2節 弥生時代中期

先述したように第3遺構面（第IX層上面）は弥生時代中期後半の遺構面であり、その直上に堆積した第VIII層からは多量の弥生土器が出土した。ただVIII層からは古墳時代後期の遺物も出土しており、その形成には時間幅があるようである。またVIII層上面はその上層のVI、





層・遺構	壺				短頸壺	無頸壺
	口	口	口	口		
壺層上面	 a	 b	 c	 d		
壺層	6	8	1	1		
遺構	25-00	3	1	1		
	29-00	1		1		
	30-00	1	3			1
	469-00					
	他の遺構	4	1	1		
不明・他	1	1				2
計	32	15	6	2	2	6

表3 器種別弥生土器点数表(1)






層・遺構	(中・小形) 壺			大形 壺	
	口	口	口	口	口
壺層上面	 a	 b	 c	 a	 b
壺層	3	9	1	3	1
遺構	25-00	1	1		
	29-00	3	2	1	
	30-00	4	1	1	
	469-00	3	2	1	2
	他の遺構	2	3	6	1
不明・他		4	1		
計	3	35	11	15	5

表4 器種別弥生土器点数表(2)

Ⅵ層と複雑に入り組んだような状態が看取され、Ⅵ、Ⅶ層形成時にかなり攪乱されたようである。したがってその際にⅥ層の上部あるいはさらに上方に堆積していた層が削平された可能性が極めて高い。

なお、今回の調査では弥生時代後期の土器、古墳時代の土器、あるいは奈良時代の土器と断定できるものはまったく出土していない。

(1) 時期

今回、Ⅵ層中、同上面あるいは第3遺構面で確認した遺構を中心に多量の弥生土器が出





層・遺構	鉢				器台
					
Ⅷ層上面		1		7	5
Ⅷ層	1	1		4	3
遺構	25-00				
	29-00			2	
	30-00			1	
	469-00				
	他の遺構		1		1
不明・他		1	1	1	
計	1	4	1	16	8

表5 器種別弥生土器点数表(3)


層・遺構	高杯			その他の器種 (口縁部に限らない。)	器種不明口縁
					
Ⅷ層上面			7	無須壺用蓋1, 土器製作台1	8
Ⅷ層			2		1
遺構	25-00		1	無紋土器系? 土器1	
	29-00	1	2		
	30-00		1		
	469-00		2	費用蓋1	
	他の遺構		1		1
不明・他		2	水差1		2
計	0	1	18		5

表6 器種別弥生土器点数表(4)

器種 遺構	壺		甕		鉢	高杯	その他の器種	計
	広口壺	短頸壺	中小甕	大甕				
25-00	5		4			2	無紋土器系? 土器1	12
29-00	2		5	1	3	3		14
30-00	4	1	5	1	1	2	ミニチュア土器1	16
469-00			5	3		2	費用蓋1	11
計	13		24	4	9		3	53

表7 第3遺構面主要遺構出土土器点数表

※別個体であることが識別できるもののみを対象とした。
 ※(中小)甕の点数が表4を上回るものがあるのは、より多い底部片を確認したことによる。
 ※30-00の短頸壺は水差の可能性がある。

土し、その量は5,900片余、56kgに及ぶ。

これらの土器は凹線紋が見られることから中期後半に属することは一見して明らかである。ここでは最近発表された森田克行氏の撰津における弥生土器編年をもとにさらに詳細な時期決定を試みる。³⁾なお各層、各遺構から出土した土器は相互に大きな時期差があるとは考えられず、全出土土器を、口縁を中心に各器種ごとに検討してみる。(表3～6)

広口壺 口縁の形態は凹線紋を施すもの(b・c)施さないもの(a)の両者が見られ、その比は約2:3である。前者の中には端部を垂下してその面上に凹線を3条以上施すもの(c)も少なくない。ただ第I様式からの系譜をたどれる口縁部の大きく開くものや断面三角形の突帯はすでにまったく確認できず、70のようにやや後期的な様相を呈するものが若干見られる。施紋については土器の遺存状態はあまり良好とは言えないため統計的には言えないが、櫛描紋、ヘラ描斜格子紋は確認できた。

有段口縁のもの(d)は少ないがいずれもやや外閉き気味で口縁端部と屈曲部に各1条の凹線を施す。

短頸壺 出土量はわずかであるが、体部から口縁部までなだらかに続き、口縁部に凹線を施すものが認められる。

無頸壺 出土量はわずかであるがⅦ層より出土した68は端部外面に凹線を施し、同内面にはヘラによる刻み目を入れている。

甕 煮沸用の中・小形と貯蔵用の大形(口径25cm以上)に分類できる。

中・小形甕は口縁が頸部になだらかに続くもの(a)と屈曲するもの(b・c)に大別できるが後者が圧倒的に多い。また後者には凹線紋を施すもの(c)も少なくない。内外面ともハケ調整が多いが、外面にヘラケズリが認められるものも存在する。

大形甕は頸部が短く屈曲した後、口縁端部を上下、あるいは上方のみ拡張したものの(a)と凹線を施すもの(b)に大別できる。端部に刻み目を入れるものもある。中期後半の大形甕にはしばしば外面に平行タタキ跡が残るが今回の調査では確認できなかった。

鉢 屈曲する体部に折り返し状(a)あるいは段状(b)の口縁部の続くものと、椀状の体部に直口の口縁が続くもの(c・d)に大別でき、後者の多くには凹線を施す。(d)

球形の体部に短く外反する口縁部の続くものは少ない。(91) また64のようなやや内湾気味に立ち上がるものを森田氏はⅣ-3様式の指標としている。

高杯 杯部が屈曲して立ち上がるもの(a・b)もあるが、水平口縁のもの(c)がほとんどを占める。それらは内方突出部がしっかりしており、端部も大きく垂下させるが、

69のように退化した形態も存在する。

他に器台、無頸壺の蓋、甕の蓋、あるいは台形土器などが認められるがいずれも量はわずかである。

以上の成果を森田氏の編年に照らし合わせて見てみると、口頸部の大きく開く丈高な広口壺（森田氏の言う北摂形広口壺）はすでになく、壺頸部の凹線の消失もこれと連動した動きであろう。さらに断面三角の突帯もまったく見られない。これらの事実は今回出土した土器群が氏のⅣ-2様式まで遡らないことを示している。その一方で短頸壺（113）、鉢（64）、台形土器（49）などは氏のⅣ-3様式の特徴を顕著に有しており、今回出土した土器群の上限はおのずと明らかとなってこよう。

下限はどうであろうか。氏が中期最終末に置くⅣ-4様式には今回検出したような段状口縁を有する鉢（b）は存在せず、台形土器も現状では確認されていないと言う。有段の広口壺（d）や水平口縁の高杯（c）もⅣ-4様式に下ると言えるほど退化していない。また同様式に漸増するとされるタタキ痕もまったく確認されていない。後期的な様相を帯びる広口壺（70）やへら描沈線紋を有する高杯脚部（74）などはやや後出の要素であるが、Ⅳ-3様式にも散見されるものである。

繰々述べてきたが、今回出土した土器群はいずれも森田編年のⅣ-3様式に限られると言っても大過ないであろう。

（2）集落の性格

今回検出した諸遺構は調査区の範囲が集落の一画であったことを如実に示している。ただ個々の性格については2棟の掘立柱建物はともかく、その他の遺構については決し難かったが、特に注意すべき遺物の出方をしているわけではなく、少なくとも本文中で触れた諸遺構については土器廃棄遺構と考えるのが妥当であろう。ただ29-00は甕棺墓の、55-05は方形周溝墓の周溝の可能性もまったく捨て去るわけにはいかない。なお2棟の掘立柱建物は各柱穴が小さく、総柱でもないため倉庫の可能性は考えにくく、簡単な構造の高床式、あるいは平地式の建物を想定したい。またほぼ南北に主軸をとって並んでいることから同時期に存在した可能性が高い。

今回出土した土器の胎土は長石、石英、チャートを含み、くさり礫も散見されることから在地の粘土を用いて製作されたものと考えられ、生駒西麓など他地域から運ばれてきたと推測される土器はまったく確認できなかった。ただ82は口縁部を丸め込むように収める

土器で、在地ではその型式変化を追えないものである。近畿地方でも近年出土例が散見されるようになった、朝鮮半島に出自をもつ無紋土器系の土器との関係を考慮すべきであろう。

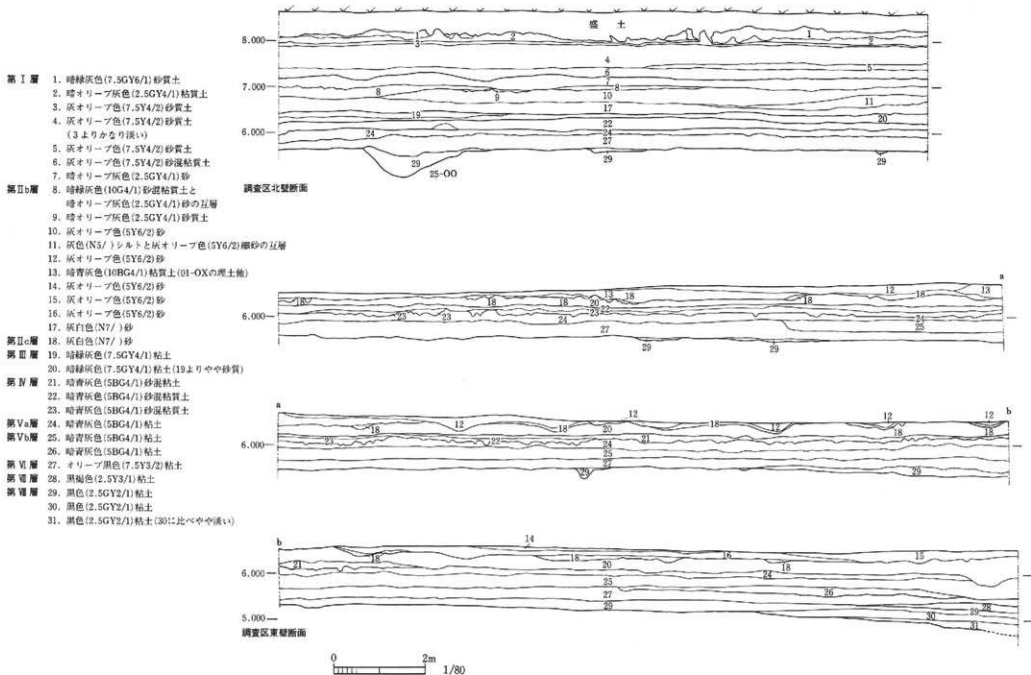
集落の存続期間は前項でも検討したように土器から見るかぎり弥生時代中期後半の一小様式の中で収まるものであり、長期にわたるものではなかったことは間違いない。もう少し詳細に述べるならば、本文中で触れた主要遺構が101-O Bと55-O Sなど一部を除くとほとんどお互い切り合っておらず、その多くが同時併存したと考えると差し支えないこと、2基の掘立柱建物も同時併存の可能性が高く、他に明確な建物跡が確認されなかったこと、その2点を重視して遺跡の存続時間も掘立柱建物の耐久年限を大きく越えるものではなかったと考えるのが自然であろう。

次に集落の範囲について検討する。今回検出した諸遺構は調査区の北部に集中し、調査地が集落の南限にあたることを示している。やや離れるが南方300mで行われた府教委の調査では弥生時代各時期の方形周溝墓は確認されたものの集落跡は確認されておらず、その想定を裏付ける。東方についても旧茨木川を越えると弥生時代中期の遺構・遺物は顕著に認められない。さらに調査地のすぐ西側を南西から北東方向に延びる阪急京都線を越えると弥生時代の遺構・遺物はほとんど確認できない⁵⁾。従って現在までの知見による限り、集落は直径100mに満たないごく小規模なものであったと考えるのが妥当である。

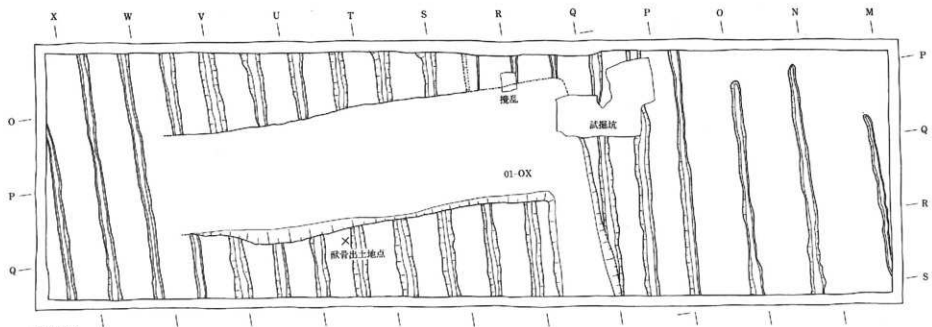
弥生時代中期の東奈良集落は今回の調査区の南西500mのJR東海道貨物支線あたりに中心があると考えられ、それをとりまくように方形周溝墓群が広がる。今回検出した小集落はさらにその外側に位置しており、遺跡中心部から一時的に分村して成立したものであろう。その分村の契機についてはよくわからないが、出土遺物を見る限り一般の弥生集落とほとんど変わるところはなく、茨木川沿いに展開したであろう可耕地の拡大に伴うものと考えられるのが自然である。

註

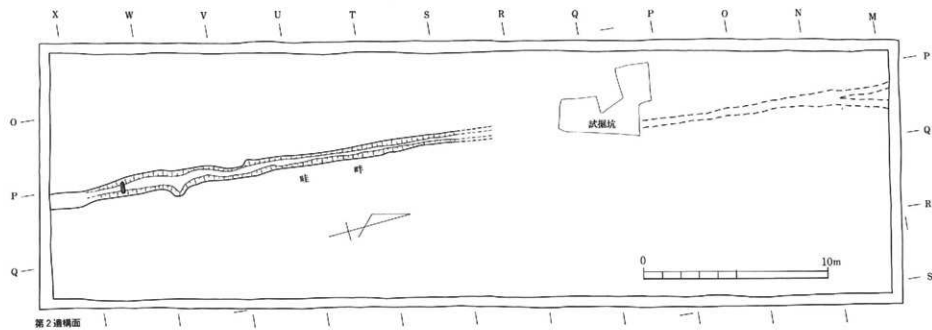
- 1) 尾上 実「南河内の瓦器論」『藤沢一夫先生古稀記念古文化論叢』1983
- 2) 橋本久和「高槻における中世土器の編年」高槻市教育委員会『土牧遺跡発掘調査報告書』1980
- 3) 森田克行「摂津地域」『弥生土器の様式と編年II』1990
- 4) 大阪府教育委員会『東奈良遺跡発掘調査概要II』1990
- 5) 茨木市教育委員会・奥井哲秀氏の御教示による。



第40図 調査区断面図

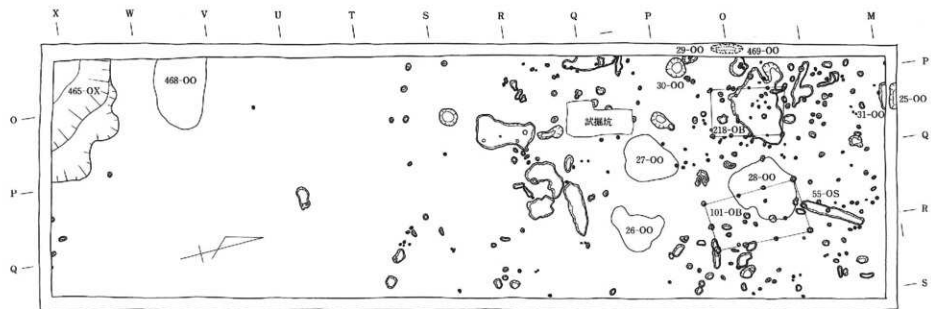


第1道横面

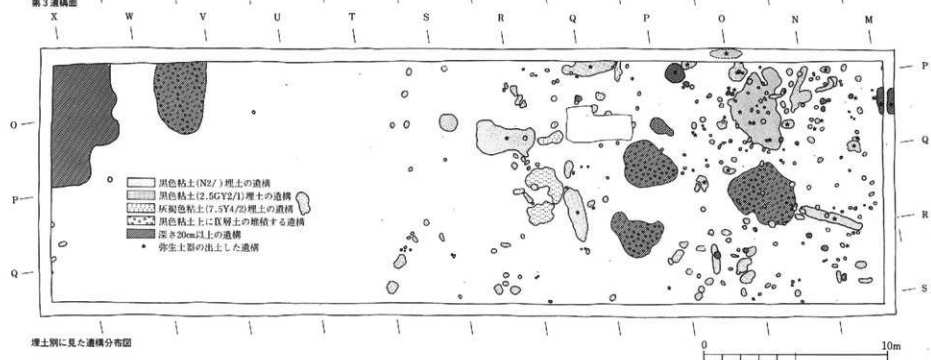


第2道横面

第41图 第1・2道横面全体图



第3遺構面



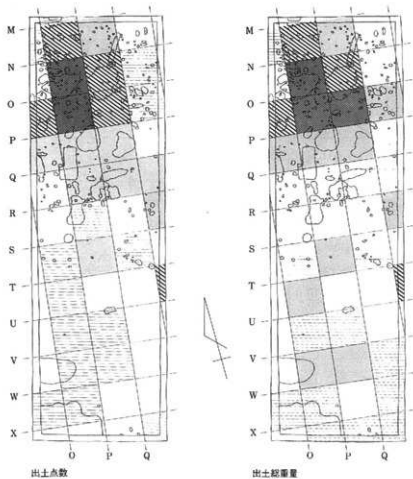
埋土別に見た遺構分布図

第42図 第3遺構面全体図

地区	A.出土点数	B.総重量 (g)	B/A (g)	地区	A.出土点数	B.総重量 (g)	B/A (g)	地区	A.出土点数	B.総重量 (g)	B/A (g)
LP	85	650	7.6	PP	197	1,360	6.9	TO	90	1,080	12.0
MO	71	550	7.7	PQ	130	1,040	8.0	TR	237	2,540	10.7
MP	229	2,070	9.0	PR	23	220	9.5	UO	73	770	10.5
MQ	173	1,560	9.0	QO	18	340	18.8	UP	58	570	9.8
MR	25	170	6.8	QP	120	910	7.5	VO	87	1,180	13.5
NP	312	3,140	10.0	QQ	156	990	6.3	VP	89	1,100	12.3
NQ	279	3,730	13.3	QR	104	910	8.7	VQ	38	400	10.5
NR	54	810	15.0	RO	50	510	10.2	WN	60	790	13.1
NS	3	70	23.3	RP	85	480	5.6	WO	56	600	10.7
OO	242	2,020	8.3	RQ	44	420	9.5	WQ	36	350	9.7
OP	439	3,400	7.7	RR	123	1,325	10.7	XO	18	180	10.0
OQ	293	2,810	9.5	SO	60	775	12.9	XP	14	240	17.1
OR	94	1,280	13.6	SP	136	1,595	11.7	XQ	56	550	9.8
PO	147	1,560	10.6	SQ	62	620	10.0	合計	4,666	45,665	9.8

※いずれもⅡ層とⅢ層上面出土弥生土器の合計。遺構出土分は除く。

表8 地区別弥生土器出土点数および重量



	出土点数	出土総重量
	50点未満	100g未満
	50以上～100未満	100g以上～1,000未満
	100以上～200未満	1,000g以上～2,000未満
	200以上～300未満	2,000g以上～3,000未満
	300点以上	3,000g以上



※いずれも竪層と竪層上面出土弥生土器の合計。連続出土分は除く。

第43図 地区別弥生土器出土点数および重量分布図

附章 東奈良遺跡における花粉・珪藻分析

川崎地質株式会社（担当者・渡辺正巳）

はじめに

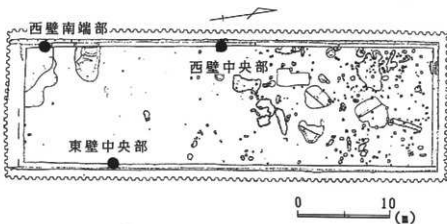
東奈良遺跡は、大阪府北部の茨木市東奈良地区に広がる遺跡である。本報は、東奈良遺跡周辺での古環境変遷の推定を行うために、財団法人大阪府埋蔵文化財協会が川崎地質株式会社へ委託して実施した分析調査の概報である。

分析試料について

第44図の3地点で試料採取を行った。これらのうち、西壁南端部は比高1m程度の凹地(465-OX)であり、ここでの試料については花粉分析および珪藻分析を実施した。その他の地点では花粉分析のみを実施した。それぞれの地点での柱状図および試料採取層準を、第45～49図に示す。

分析方法および分析結果

花粉分析方法および珪藻分析方法は、川崎地質株式会社（1993）に従った。



第44図 花粉分析試料採取地点

花粉分析結果を第45～47図の花粉ダイアグラムに示す。花粉ダイアグラムでは、木本花粉総数を基数とする百分率で各々の種類をダイアグラムに表した。

珪藻分析結果を第48・49図の珪藻ダイアグラムおよび珪藻総合ダイアグラムに示す。全体に破損した珪藻殻が多く、種を決定できないものが多くあった。珪藻ダイアグラムでは、検出総数を基数とする百分率で各々の種類をダイアグラムに表した。また、含有量が少なく検出総数が100未満の試料では、検出できた種類を*で示した。珪藻総合ダイアグラムでは、基数が50以上になる試料のみダイアグラムに表した。

花粉分帯

西壁南端部の試料をもとに以下の様に花粉分帯を行った。

I帯(試料No.2、1)：マツ属(複雑管束亜属)、スギ属が、他の木本花粉に比べやや高い出現率を示す。草本花粉では、イネ科(40ミクロン以上)が高い出現率を示す。

II帯(試料No.3)：マツ属(複雑管束亜属)が卓越する。草本花粉では、イネ科(40ミクロン以上)が高い出現率を示す。

III帯(試料No.9～4)：アカガシ亜属が卓越し、スギ属、マツ属(複雑管束亜属)を伴う。また、イネ科(40ミクロン以上)が100%近い出現率を示す。さらに、スギ属が減少傾向を示し、マツ属(複雑管束亜属)が増加傾向を示すa亜帯(試料No.5、4)と、スギ属がアカガシ亜属と同程度の出現率を示すb亜帯(試料No.9～6)に細分した。

IV帯(試料No.14～10)：アカガシ亜属が卓越し、コナラ亜属を伴う。前帯に比べ、草本花粉の出現率がやや高くなる。

V帯(試料No.15)：コナラ亜属が卓越し、アカガシ亜属を伴う。草本花粉はほとんど出現しない。

一方、西壁中央部および東壁中央部の各試料は、第46・47図に示すような花粉帯に対応し、各試料の採取層準とも矛盾しない(表9)。

また各層準での出土遺物(本編参照)から、V帯、IV帯が弥生時代中期後半以前、III帯a亜帯が弥生時代中期後半～平安時代前半、III帯b亜帯が平安時代後半～鎌倉時代、II帯が鎌倉時代、I帯が鎌倉時代以降の植生を反映する。

珪藻分帯

以下のように珪藻分帯を行った。

I帯（試料No.3、2）：特に高率で出現する種類はない。海水生種や汽水生種が検出される。

II帯（試料No.5、4）：*Pinnularia* spp. および他の底生種が高い出現率を示す。

III帯（試料No.9、8）：*Pinnularia* spp. が特に高い出現率を示す。

IV帯（試料No.11、10）：III帯とV帯との漸移的な珪藻組成を示す。

V帯（試料No.13、12）：*Exonotia biareofera*が特に高い出現率を示す。

VI帯（試料No.15、14）：*Cymbella* spp.が特に高い出現率を示し、*Exonotia biareofera*、*Pinnularia* spp.などが検出できる。

古環境変遷

花粉分帯をもとに古植生の、珪藻分帯をもとに堆積環境の推定を行った。

V帯期（弥生時代中期後半以前、およそ6000y.B.P.以前？）：大阪湾沿岸地域でコナラ亜属が卓越する時期はおおよそ6000y.B.P.以前（古谷 1979）であり、V帯がこの時期の植生を反映している可能性がある。

ここでのコナラ亜属は、ミズナラやカシワなどの冷温帯林の構成種と考えられ、丘陵から山地まで広く分布していたと推定できる。一方、アカガシ亜属も検出されることから、低地ではカシ類を要素とする照葉樹林が分布していたことも推定できる。

IV帯期（弥生時代中期後半以前、縄文時代前期～中期？）：コナラ亜属の出現率は、アカガシ亜属に比べ低い出現率であるものの、他の種類に比べ高い。このことからIV帯は、アカガシ亜属とコナラ亜属の卓越種変換期から、そう遠くない時期の植生を反映していると考えられる。

低地や千里丘陵や高槻丘陵などにはカシ類を要素とする照葉樹林が広く分布しており、北摂山地にはミズナラやカシワなどを要素とする冷温帯林が分布していたと推定できる。発掘地点周辺周の自然堤防上には、キク科やイネ科、カヤツリグサ科の草本が茂っていたと推定できる。

珪藻分帯のVI帯～IV帯で卓越する*Exonotia biareofera*や、*Cymbella* spp.、*Pinnularia* spp.はいずれも沼沢地で多く見られる。したがって、西壁南端部の凹地は河川のような流れのある環境ではなく、水深の浅い流れのない沼沢地の様な環境であったと考えられる。

III帯b 亜帯期（弥生時代中期～平安時代前半）：低地や千里丘陵や高槻丘陵などにはカ

シ類を要素とする照葉樹林が広く分布しており、北摂山地の山腹には現在高槻市本山寺に見られるようなスギ、ツガ、モミを要素とする中間温帯林が広く分布していたと推定できる。また山頂部にはブナを要素とする冷温帯林が分布した可能性もある。また、Ⅲ帯b亜帯から上位でイネ科（40ミクロン以上）が高率となることから、弥生時代中期後半～古墳時代後期頃には遺跡内で水田耕作が行われていたと推定できる。

珪藻分帯のⅢ帯で卓越する*Pinnularia* spp.は、自然環境下では沼沢地で多く見られる。したがって、花粉分析結果とあわせると試料№9、8の層準は水田であったと考えられる。

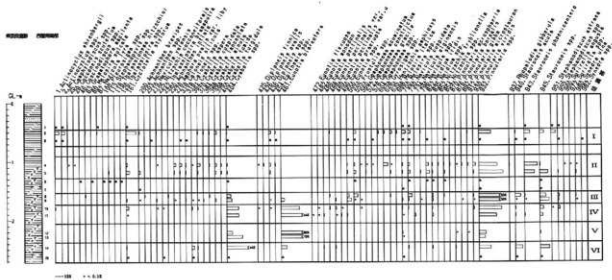
Ⅲ帯a亜帯期（平安時代後半～鎌倉時代）：低地や千里丘陵や高槻丘陵などにはカシ類を要素とする照葉樹林が広く分布しており、北摂山地の山腹には現在高槻市本山寺に見られるようなスギ、ツガ、モミを要素とする中間温帯林が広く分布していたが、アカマツを要素とする二次林がこれらに変わって分布域を広げていったと推定できる。また、イネ科（40ミクロン以上）が連続して高率で出現することから、遺跡内では引き続き水田耕作が行われていたと推定される。このことは西壁南端部試料№4の採取層準上面が水田遺構面である（本文参照）ことから明らかである。さらに西壁南端部試料№4ではソバ属花粉が検出できることから、b亜帯期末頃には、遺跡内の水田で輪作としてソバ栽培が行われていた可能性がある。

Ⅲ帯b亜帯からa亜帯への花粉組成の変化は、いわゆる「弥生の小寒冷期」から温暖期への遷移の影響とも考えられる。しかしこの地域は、平安京、長岡京など古代都市の近隣に位置し、古代都市建築のための樹木伐採が行われていた可能性の極めて高い地域である。したがって、Ⅲ帯b亜帯からa亜帯への花粉組成の変化は気候変化のみによっておこったものではなく、人為的な森林破壊の影響も無視できない。

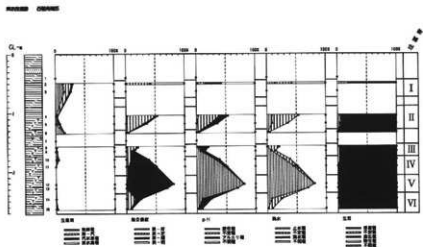
珪藻分帯のⅡ帯では海水種や汽水種が検出される。しかし、現在の標高等からこの地点が平安時代～鎌倉時代にかけて大阪湾に望み、海水の影響を受ける湿地であったとは考え難く、二次堆積などによる混入と考えられる。*Pinnularia* spp.や他の底生種が高い出現率を示すこと、花粉分析結果などから、水田であったと考えられる。

Ⅱ帯期（鎌倉時代）：千里丘陵や高槻丘陵ではアカマツを要素とする二次林が広く分布し、局地的にカシ類を要素とする照葉樹林が分布していたと推定される。北摂山地でもアカマツを要素とする二次林が分布域を広げ、スギ、ツガ、モミを要素とする中間温帯林の分布域は狭くなっていったと考えられる。

西壁南端部試料№2、3および西壁中央部試料№1、東壁中央部試料№1は、地層内の



第48図 西壁南端部の珪藻ダイアグラム



第49図 西壁南端部の珪藻総合ダイアグラム

上下方向、平面的分布の違いを考察するために同じ地層内（上面が畑作遺構面）で採取したものであった。西壁南端部で見られるように、地層内の上下で花粉組成が急激に変化し、異なる花粉帯が確認できた。しかし東壁中央部試料No.1は、I帯とII帯の中間的な要素を持つ花粉組成を示すことから、II帯からI帯への変化は短期間での連続した変化であることが明らかになった。

I帯期（鎌倉時代以降）：千里丘陵や高槻丘陵では、II帯期と同様にアカマツを要素とする二次林が広く分布し、局所的にカシ類を要素とする照葉樹林が分布していたと推定される。またスギ属花粉が増加傾向を示し、スギが分布域を広げたと考えられる。マツ属（複維管束亜属）の減少とスギ属の増加は、大阪湾岸地域では近代以降の花粉組成の特徴であり、そこでのスギ属の増加（マツ属（複維管束亜属）の減少）は、スギ植林の結果である。I帯に見られるスギ属の増加、マツ属（複維管束亜属）の減少もこれに対応する可能性があるが、I帯中の西壁南端部試料No.2を含む層が鎌倉時代の畑作遺構面である（本文参照）ことと矛盾する。したがって、鎌倉時代あるいはこれに続く時期の気候変動あるいは人為的な植生変化による影響であると考えられる。また局地的な植生を反映した結果とも考えられるが、判断は今後のデータ蓄積後に譲る。

西壁中央部（試料No.1）ではカヤツリグサ科が高率で検出されるが、西壁南端部の同層の試料（試料No.2）ではさほど高率にならない。したがってカヤツリグサ科の雑草が、西壁中央部を中心として畑あるいは水田内で生育していたと考えられる。

また、西壁南端部の試料No.2採取層上面は畑作遺構面、No.4採取層上面は水田遺構面とされている（本文参照）が、両試料ともにイネ科（40ミクロン以上）が高率で検出され、畑作物であるソバも検出されるなど、両試料間では草本花粉組成に有意な差は認められなかった。おそらく埋積時には水田、畑として利用されており、輪作で水田・畑として利用されていた時期があったと推定できる。

珪藻分帯のI帯ではII帯よりさらに海水種や汽水種が高率となる。これらは浮遊種の*Melosira*属も含め、珪藻分帯のII帯と同様に二次堆積によると考えられる。したがって、II帯、I帯ともに*Pinnularia* spp.や他の底生種が高い出現率を示すこと、花粉分析結果などから、水田であったと考えられる。

まとめ

東奈良遺跡において行った分析から以下の事がわかった。

(1) 花粉帯としてⅠ～Ⅴ帯を設定した。さらにⅢ帯を a、b 亜帯に細分した。

このうちⅤ帯は、花粉組成の特徴からおよそ6000y. B. P. 以前の植生を反映した可能性がある。

(2) 花粉帯をもとにおよそ6000y. B. P. ? から鎌倉時代頃に至る6時期の、遺跡周辺から北摂山地に至る地域の古植生を復元した。特に以下に示す3点が、今回特筆すべき事柄である。

①Ⅲ帯 a 亜帯に見られるスギ属の減少、マツ属（複維管束亜属）の増加は、気候変化の他、人為的な森林破壊にも起因すると推定できる。

②Ⅰ帯期に見られるスギ属花粉の増加、マツ属（複維管束亜属）の減少には、いくつかの原因が推定された。原因の特定は、今後のデータ蓄積により可能となろう。

③またⅠ帯期では、平面採取によりカヤツリグサ科雑草の生育域分布の一部が明らかになった。

④鎌倉時代におけるソバの栽培は、稲作の輪作として行われていた可能性がある。

(3) 珪藻帯としてⅠ～Ⅵ帯を設定した。

(4) 珪藻帯をもとに堆積環境の推定を行った。この結果、調査区南西部に見られる凹地は、流れのない水深の浅い沼沢地であったと考えられる。

引用文献

川崎地質株式会社「芝ノ垣外遺跡の花粉・珪藻分析」『芝ノ垣外遺跡Ⅱ』大阪府埋蔵文化財協会393-413 (1993)

古谷正和「大阪周辺地域におけるウルム氷期以降の森林植生変遷」『第四紀研究』18 121-141. (1979)

遺物觀察表

実測図 番号	図版 番号	遺物 番号	出土 地区	出土層位 出土遺構	遺物の種類	残存率	法 量	色 調	特 徴	
12R	12	1	RQ	II層	瓦器	碗	上部1/5	復元径12.0cm	明オリーブ灰色(2.5GY2/1)	口縁端部横ナデ、外面指オサエ、内面幅0.5mmのヘラミガキ。炭素吸着量少。
12R		2	西壁 トレン	II層	瓦器	碗	≒ 1/10	≒ 13.0cm	灰白色	口縁端部横ナデ、外面指オサエ、内面幅1.5mmのヘラミガキ。口縁のみ炭素吸着。
12R		3	?	II層	瓦器	碗	≒ 1/10	≒ 14.0cm	灰白色	口縁端部横ナデ、外面指オサエ、内面幅1mmのヘラミガキ。部分的に炭素吸着。
12R	12	4	?	II層	瓦器	碗	≒ 1/4	≒ 12.0cm	灰白色(7.5Y8/1)	口縁端部横ナデ、外面指オサエ、内面幅1.5～2mmのヘラミガキ(1条のみ)。部分的に炭素吸着。
12R		5	RQ	II層	瓦器	碗	≒ 1/10	≒ 13.8cm	灰白色(N8/)	口縁端部横ナデ、外面指オサエ。外面～内面上半炭素吸着。全体に磨減激しい。
12R		6		II層	瓦器	碗	底部1/2	復元高台部径 4.2cm	灰白色(N8/)	高台は断面半円形。内外面に炭素吸着。磨減激しい。
12R		7		II層	瓦器	碗	≒ 1/4	≒ 高台部径 5.1cm	灰色(N4/)	高台は断面台形。足込みに幅3mmのヘラミガキ(3条)。
12R	12	8		II層	青磁	碗	上部1/8	復元径18.0cm	灰白色(2.5GY8/1)	玉縁口縁。その下端は凹む。
12R		9		II層	土器	皿	1/8	≒ 12.0cm	灰白色(2.5Y8/2)	体部上半は肥厚し、端部は鈍い面をなして終わる。上半部横ナデ。
12R		10	UQ	II層	土器	皿	1/8	≒ 10.0cm	ぶらべら色(2.5YR7/3)	直線的に開き、体部上半は肥厚し、鈍い面をなす。口縁部深み大きい。上半部横ナデ。
12R	12	11	SP	III層	瓦器	碗	上部1/10	≒ 14.0cm	(外)灰白色(7.5Y8/1) (内)灰白色	口縁端部歪む。口縁端部横ナデ、外面指オサエ。内面幅1mmのヘラミガキ。炭素吸着量少。
12R	12	12	WQ	III層	瓦器	碗	≒ 1/6	≒ 14.0cm	灰白色	口縁端部肥厚。口縁端部横ナデ、外面指オサエ。内面わずかに幅2mmのヘラミガキ。炭素吸着は認められない。
12R		13	QR	III層	瓦器	碗	≒ 1/10	≒ 13.7cm	灰色(N4/)	口縁端部横ナデ、外面指オサエ。内面幅2.5mmのヘラミガキ。全面に炭素吸着。
12R	12	14	UP	III層	瓦器	碗	≒ 1/8	≒ 13.8cm	灰白色(7.5Y8/1～10Y8/1)	口縁端部横ナデ、外面指オサエ。内面幅2mmのヘラミガキ。全面に炭素吸着。
12R	12	15	MQ	III層	瓦器	碗	1/8	≒ 13.0cm	灰白色(10Y8/1)	口縁端部横ナデ、外面指オサエ。内面幅3mmのヘラミガキ。全面に炭素吸着。
12R		16	SP	III層	瓦器	碗	上部1/10	≒ 13.0cm	暗灰色(N3/)※炭素吸着部	口縁端部横ナデ、外面指オサエ。内面幅2mmのヘラミガキ。全面に炭素吸着。
12R	12	17	OO	III層	瓦器	碗	1/8	≒ 13.1cm	(外)灰色(N6/) (内)灰色(N5/)	高台をわずかに認める。口縁端部横ナデ、外面指オサエ。内面幅1mmのヘラミガキをまばらに施す。全体に炭素吸着。
12R	12	18	MQ	III層	瓦器	碗	1/5	≒ 12.6cm	灰白色(7.5Y8/1)	極めて小さい高台付器。内外面とも磨減激しい。口縁端部横ナデ、外面指オサエ。炭素吸着認められず。

実測図 番号	図版 番号	遺物 番号	出土 地区	出土層位 出土遺物	遺物の種類	残存率	法 量	色 調	特 徴
1285		19	UP	III層	瓦器 鉢	底部1/2	復元高台部径 5.2cm	灰白色(7.5Y8/1)	高台をわずかに付着。内面幅1mmのヘラミガキ。炭素吸着認められず。
1285		20	MP	III層	瓦器 鉢	底部1/4	復元高台部径 4.5cm	灰色(N5/ -4/)	高台をわずかに付着。内面幅3mmのヘラミガキ。内外面に炭素吸着。
1285	12	21	TQ	III層	土師器 土釜	一部残存	復元胴部径 32.8cm	(胴上半および内面)灰白色(2.5Y8/1) (胴下半)灰白色(5YR8/2)	縁はほぼ水平に3cmのび、端部に沈線が1条走る。内面浅い指オサエ。
1285		22	NQ	III層	黒色土器 鉢	底部1/8	復元高台部径 9.2cm	明褐色(5YR7/2)～ にぶい褐色(5YR7/4)	高台は薄く、下方にのびる。底面ナデ。内面磨減激しいが若干炭素吸着。
1285	12	23	TQ	III層	瓦質土器 鉢	一部残存	復元径30.4cm	灰オリブ色(5Y5/2)	直線的に開き、端部は面をなす。口縁端部横ナデ、内外面指ナデ、外面全体に焦付着。
1285	12	24	OP	III層	白磁 碗	一部残存	≒ 18.0cm	灰白色(7.5Y8/1)	直線的に開き、端部は玉縁状。
1285	13	25	LQ	IV層	土師器 皿	1/4	復元径7.4cm 復元高1.1cm	(外)灰黄色(2.5Y7/2) (内)にぶい黄褐色(10YR7/2)～にぶい褐色(5YR7/4)	体部全面横ナデ、底面指オサエ。
1285	13	26	RQ	IV層	土師器 皿	1/4	復元径9.6cm 復元高1.3cm	灰黄色(2.5Y7/2)	底部やや上り底。体部上半横ナデ、底面指オサエ、ナデ。
1285	13	27	RO	IV層	土師器 皿	1/8	復元径10.0cm 復元高1.3cm	灰白色(10YR8/2)	体部に明瞭な段有する。体部上半横ナデ、底面指オサエ、ナデ。底部内面指ナデ。
1285	13	28	OP	V層	瓦器 碗	1/8	復元径13.8cm	灰白色(10Y8/1)	口縁やや外反気味に開く。口縁端部横ナデ、外面体部中心位斜方向ナデ、胴下位指オサエ、内面指ナデ後わずかに幅1mmのヘラミガキ。外面のみ炭素吸着。
1285	13	29	OP	V層	瓦器 碗	上部1/6	≒ 15.0cm	明オリブ灰色(2.5GY7/1)	口縁端部横ナデ、外面指オサエ、内面幅2mmのヘラミガキ。全体に弱く炭素吸着。
1285		30	WQ	V層	土師器 皿	上部1/10	≒ 16.0cm	灰白色(2.5Y8/2)	口縁端部横ナデ、外面指ナデ。
1285		31	OO	V層	瓦器 碗	底部1/3	復元高台部径 5.3cm	灰白色	高台は低い台形断面を呈する。内面幅1mmのヘラミガキ。炭素吸着は認められず。
1285	13	32	QP	V層	土師器 皿	上部1/8	復元径11.5cm	淡黄色(2.5Y8/3)	体部上半は横ナデにより外反し端部はつまみあげ気味に丸く終わる。内面、底面指ナデ。
1385		33	OO	VI層上面	須恵質土器 甕?	一部残存	現存幅13.2cm ≒ 長10.0cm	灰白色(N7/)	外面平行タタキ痕、内面同心円状(?)後両面ナデ。外面鉄分付着。
1385		34	XQ	VI層	瓦質 埴?	一部残存	現存幅9.9cm ≒ 長8.5cm 厚4.2cm	褐色(10YR6/1)～灰黄褐色(10YR6/2)断面中位はにぶい褐色(5YR7/3)	各面とも指ナデ調整だが、割線激しい。2次焼成を受け、全体にくすぶる。胎土砂粒多い。
1385		35	RP	VI層	須恵器 瓶	口縁1/5	復元径10.5cm	灰色(N6/) 断面は 灰赤色(7.5R5/2)	やや内湾気味に開き端部は丸く終わる。回転ナデ調整。砂粒まばら。
1385	13	36	MP	VI層	瓦器 碗	1/5	復元径15.6cm	暗灰色(N3/)≒炭素 吸着部	口縁端部横ナデ、外面指オサエ内面ナデ後、内外面ともヘラミガキ。
1385		37	UQ	VI層	瓦器 碗	底部1/8	復元高台部径 4.5cm	灰白色(2.5Y8/1)	断面三角の高付付着。外面指オサエ。焼成せく、土師器に近い。

発掘 番号	図版 番号	遺物 番号	出土 地区	出土層位 出土遺構	遺物の種類	残存率	法 量	色 調	特 徴	
13図		36	XQ	VI層	土師器 甌	底部1/10	復元径11.9cm	灰白色(2.5Y8/2)	体部上半は横ナデで外反し、端部はつまみ上げ気味に丸くおさめる。	
13図	13	39	WN	VI層	黒色土器 碗	底部1/8	復元高台部径9.6cm	灰白色(2.5Y8/2)	断面三角の高台付着。内面のみ炭素着色し、青黒色に変化。	
13図	17	40	南堂 トレンテ	VI層	鉄器 馬鞍歯	完 存	長さ 14.1cm 最大幅2.3cm 厚さ 1.0cm 重さ 106g		平面形状をなし、断面は方形をなすが先端に向かうに連れて丸みを帯び、楕円状になる。全体に錆蝕し使用痕等不明。	
13図	17	41	QQ	VI層	鉄器 鋸頭 鉄棒	完 存	長さ 11.2cm 最大幅2.3cm 厚さ 0.4cm 重さ 17g		首部先端が最も幅広で薄く、基部に向かうに連れて狭く厚くなる。断面形態も方形に近くなる。基部断面も方形を呈する。錆蝕し使用痕等不明。	
13図	17	42		VI層	石器 石鏝	完 存	長さ 3.9cm 最大幅1.8cm 厚さ 0.7cm 重さ 3.8g	緑黒色(5GY7/1)	凸基有基式打製石鏝。サマサイト製、2次調整は蓋で方形に凹凸多い。	
14図		43	OO	VII層上面	弥生土器 高杯	体部上半一部残存	復元径29.5cm	淡黄色(2.5Y8/4)	体部は緩やかに内湾し、端部上面は面をなして終わる。体部上半に浅い3条の凹縁紋を施す。外面黒く変色、胎土砂粒多い。	
14図		44	OP	VII層上面	弥生土器 広口壺	口縁一部残存	復元径33.7cm	褐色色(10YR5/1~4/1)	口縁端部を垂下させ、その端部に3条の浅い凹縁紋を施す。胎土砂粒多い。	
14図		45	OR	VII層上面	弥生土器 器台?	口縁一部残存	復元径40.0cm	にぶい黄色(2.5Y6/3)	口縁端部を垂下させ、その端部に浅い凹縁紋を3条以上施す。胎土砂粒まばら。	
14図		46	CQ	VII層上面	弥生土器 広口壺	口縁一部残存	復元径21.8cm	灰黄色(2.7Y7/2)	外反気味に開き、端部は上方に突出して面をなす。端部に凹縁紋2条施す。胎土砂粒まばら。	
14図		47	NQ	VII層上面	弥生土器 広口壺	口縁1/8残存	復元径21.6cm	淡黄色(2.5Y7/4)	やや丸みのある面をなす。磨痕多い。胎土砂粒含まない。	
14図		48	NP	VII層上面	弥生土器 広口壺	口縁1/8残存	復元径21.6cm	にぶい黄褐色(10YR7/2)	一旦外反した後、内湾気味に立ち上がり、上端は面をなして終わる。立ち上がりの上端と下端に凹縁施す。胎土砂粒非常に多い。	
14図		49	NQ	VII層上面	弥生土器 土器製作台	上部1/4残存	復元上端部径20.4cm	淡黄色(2.5Y7/4)	外反して上方に開いた後、平坦な上面に緩く、外面に接合痕を指でなで消した痕跡あり。磨痕多い。胎土砂粒まばらに含む。	
14図	14	50	NQ	VII層上面	弥生土器 高杯	脚部7/10残存	現存高8.4cm	淡黄色(2.5Y8/3~8/4)	裾部に向かってなだらかに広がる。杯部底面は内盤変果による。外面に縦位のヘラミダキ、内面縦り痕残る。胎土砂粒多い。	
14図		51	NR	VII層上面	弥生土器 鉢	鉢あるいは高杯	接合部ほぼ完存	現存高4.5cm	灰白色(10YR8/2)	杯部底面は内盤変果による。脚部上半に残り3条の凹縁紋。
14図		52	NQ	VII層上面	弥生土器 甕	底部?	底部径4.2cm	淡黄色(2.5Y8/4)	やや上上げ気味。外面指痕圧痕。胎土胎と砂粒含まない。	
14図	14	53	MQ	VII層上面	弥生土器 高杯?	脚部1/5	復元裾部径15.4cm	淡黄色(2.5Y7/2)	なだらかに開き、端部は面をなして終わる。端部に浅い1条の凹縁紋施す。端部に成形時の黒炭残る。胎土砂粒まばら。	

実測図 番号	採取 番号	遺物 番号	出土 地区	出土層位 出土遺構	遺物の種類	残存率	法 量	色 調	特 徴
14図	14	54	VQ	甕層上面	弥生土器 高杯?	胴部1/8	復元胴部径 17.2cm	淡黄色(2.5Y8/3)	直線的に開き、端部は上方に突出した広い面をなして終わる。磨減激しい。胎土砂粒まばら。
14図		55	MQ	甕層上面	土師器 皿	一部残存	復元径10.0cm	淡黄色(2.5Y8/3)	口縁端部やや立ち上がりによって丸くおさめる。上半部横ナデ。
14図		56	RO	甕層上面	須恵器 杯蓋	天井部完存		(外)灰白色(N7/) (内)灰色(N6/) (断面)灰白色(N8/)	天井部ヘラケズリ4条以上、焼成やや甘い。胎土砂粒多量含まない。
14図		57	OP	甕層上面	須恵器 甕?	底部1/4	復元底部径 8.8cm	灰白色(N7/)	平坦な底部からやや内湾気味の体部が続く。変化色外面は狭い面取りを施す。体部回転ナデ、底部外面ヘラケズリ。
14図	14	58	PQ ~ PR	甕層上面	弥生土器 帯あるいは大形甕	底部1/2	復元底部径 8.2cm	(外)にぶい黄褐色(10YR7/4) (内)灰色(5Y6/1)	わずかに上げ底気味の底部から直線的にのびる体部が続く。胎土砂粒多い。
15図		59	TR	甕層	須恵器 杯身	1/4	復元口径 13.0cm 復元底部径 15.4cm	灰色(N6/)	立ち上がりはやや内傾して直線的にのび、端部は丸く終わる。端部内面ににぶい段を有する。回転ナデ調整。胎土砂粒まばら。
15図		60	UO	甕層	須恵器 杯身	1/8	復元口径 13.4cm 復元底部径 16.0cm	灰白色(N7/)-灰色(N6/)	立ち上がりはやや内傾して直線的にのび、端部は丸く終わる。端部内面ににぶい段を有する。回転ナデ調整。胎土砂粒多い。磨減激しい。
15図		61	NP	甕層	須恵器 杯蓋	1/5	現存高2.2cm	(外)(内)灰白色(N7/) (断面)灰赤色(2.5YR6/2)	天井部に宝珠つまみ有する。外面3回転以上ヘラケズリ。胎土砂粒多い。焼成不良。
15図		62	OQ	甕層	須恵器 杯蓋	1/10	復元径11.0cm	(外)(内)灰色(N6/) (断面)にぶい褐色(2.5YR6/4)	扁平な体部に小さい返りが行く。返り端部はシャープ。胎土砂粒まばら。焼成良好。
15図		63	UO ~ WO	甕層	須恵器 短瓶甕	1/2	口径8.6cm 体部径10.2cm 現存高4.3cm	灰色(N5/ ~6/)	やや歪った体部から短く直立する口縁部になだらかに続く。体部回転ナデ調整。同下ヘラケズリ、外面の一部に黒色の物質付着する。胎土砂粒多い。
15図	14	64	OO	甕層	弥生土器 鉢	体部上半一部残存	復元径30.5cm 現存高5.4cm	灰白色(2.5Y8/2)	体部はほぼ直立し、端部上面は凹んだ面をなす。外面には5条以上の凹線紋を施した後、円形浮線と磨擦点線紋を平行して施す。胎土砂粒まばら。磨減激しい。
15図	14	65	VQ	甕層	弥生土器 高杯	体部上半一部残存	復元径約36cm 現存高5.2cm	にぶい黄褐色(10YR7/3)	碗状の杯部から上端に凹面を有する口縁部が続き、外面に2条の凹線紋を施す。胎土砂粒多い。外面一部に焼成時の黒斑有する。
15図		66	PR	甕層	弥生土器 広口甕	口縁1/8	復元径21.5cm	(外)にぶい黄色(2.5Y6/3) (内)にぶい黄褐色(10YR7/4)	口縁部は屈曲した後直立し、上端部は面をなす。立ち上がり部上下端に1条ずつ凹線紋を施す。胎土砂粒まばら。磨減激しい。
15図	14	67	OO	甕層	弥生土器 高杯	杯部1/10	復元径21.6cm 現存高3.9cm	灰白色(2.5Y8/2)	碗状の杯部から上端に面を有する口縁部が続き、外面に浅い2条の凹線紋を施す。胎土砂粒多い。外面の一部に焼成時の黒斑有する。磨減激しい。

実測区 番号	図版 番号	遺物 番号	出土 地区	出土層位 出土遺物	遺物の種類	残存率	法 量	色 調	特 徴	
15図	14	68	MQ	Ⅷ層	弥生土器 無類壺	口縁部一部残存	復元径21.1cm	淡黄色(2.5Y8/3)	直口の口縁を有し端部上端は面をなす。外面に2条の凹線紋。内面にへら状工具による跡目を施す。胎土砂粒多い。外面の一部に焼成時の黒斑有する。穿孔未確認。	
15図	14	69	OO	Ⅷ層	弥生土器 高杯	口縁1/6	復元径23.2cm	灰白色(2.5Y8/2)	杯部端部は水平に閉じ、その端部はわずかに下部に肥厚する。内面に突出部を有する。端面横ナデ。胎土砂粒多い。磨減激しい。	
15図		70	OP	Ⅷ層	弥生土器	広口壺	口縁1/8	復元径15.0cm	淡黄色(2.5Y8/3)	体部に外反気味に閉く短い口縁部が鋭さ、端部は面をなして終わる。口縁部内面に指オサエ痕。胎土砂粒まばら。磨減激しい。
15図	14	71	XO 南壁 トレン	Ⅷ層	弥生土器	壺?	類部? 1/5 現存最大径 15.2cm 現存高3.8cm	灰白色(3Y8/1~8/2)	強い凹線を3条以上施し、その直下にへら状工具による跡目を入れる。砂粒非常に多い。磨減非常に激しい。	
15図		72	VO	Ⅷ層	弥生土器	壺	底部完存	底部径4.6cm	灰白色(5Y8/1)	やや上げ底気味の底部。胎土砂粒多い。
15図		73	UO	Ⅷ層	弥生土器	壺	底部完存	底部径5.0cm	灰白色(2.5Y8/2)	体部外面に指オサエ痕? 底面~体部の一部に焼成時の黒斑有する。胎土砂粒まばら。
15図	14	74	OO	Ⅷ層	弥生土器 高杯	脚柱部 1/3	現存高5.7cm	淡黄色(2.5Y8/3)	ほぼ直立する脚柱部。外面に10条余のへら溝状紋を施す。胎土砂粒多い。	
15図		75	XQ	Ⅷ層	弥生土器	高杯?	裾部1/5	復元径12.4cm	灰白色(2.5Y8/2)	直線的にのび、端部は面をなして終わる。端面外面に焼成時の黒斑有する。胎土砂粒多い。磨減激しい。
15図	14	76	OP	Ⅷ層	弥生土器	高杯?	裾部1/4	復元径12.4cm	淡黄色(2.5Y8/4)	直線的にのび、端部は面をなして終わる。端面横ナデ。端面外面に焼成時の黒斑有する。胎土砂粒多い。磨減激しい。
15図		77	VQ	Ⅷ層	弥生土器	高杯?	裾部1/5	復元径12.0cm	淡黄色(2.5Y7/3)	直線的にのび、端部は面をなして終わる。胎土砂粒多い。磨減激しい。
15図		78	NQ	Ⅷ層	弥生土器	高杯?	裾部1/8	復元径13.0cm	淡黄色(2.5Y7/3)	直線的にのび、端部は面をなして終わる。端面横ナデ。胎土砂粒多い。磨減激しい。
15図	14	79	OO	Ⅷ層	弥生土器	鉢?	裾部1/6	復元径17.4cm	灰黄色(2.5Y7/2)	直線的にのび、端部は面をなして終わる。端面に凹線状の強い横ナデ。脚部外面に縦位のへらケズリ。端面内外面に焼成時の黒斑有する。胎土砂粒やや多い。
15図		80	?	Ⅷ層	弥生土器	壺用蓋?	上部完存	現存径6.2cm	灰白色(10YR8/2)	扁平なつまみ有する。胎土砂粒まばら。
15図		81	RR	Ⅷ層	弥生土器	大形壺	底部1/3	復元底径 11.5cm	淡黄色(2.5Y7/3)	平坦な底部からやや膨らみ気味に体部が続く。体部外面に縦方向の筋ナデ(?)。胎土砂粒まばら。
20図	15	82	LP	Ⅷ層上面 25-OO	無紋土器系?	壺	口縁1/6	復元口径 11.6cm	淡黄色(2.5Y8/3)	口縁はやや丸め込むように終わる。口縁~体部上平にかけて強い横ナデ。全体にくすぶった色調有する。胎土砂粒多い。

実測図 番 号	図録 番号	遺物 番号	出土 地区	出土層位 出土遺構	遺物の種類	残存率	法 量	色 調	特 徴
20図		83	LP	Ⅱ層上面 25-00	弥生 土器	口縁一部 残存	復元径13.7cm	灰黄色(2.5Y7/2)	口縁は短く外傾し、端部は面をなして終わる。口縁横ナデ、外面に縦筋。胎土砂粒地含まない。
20図	15	84	LP	Ⅱ層上面 25-00	弥生 土器	広口壺	口縁1/4 復元径14.2cm	灰黄色(2.5Y7/2)	頸部は一部屈曲して外反し、端部は上下に拡張して面をなして終わる。外面一部に縦位のヘラミガキ。胎土砂粒多い。
20図	15	85	LP	Ⅱ層上面 25-00	弥生 土器	広口壺	口縁1/5 復元径21.6cm	灰黄色(2.5Y7/2)	端部は上下に拡張した後、凹線紋2条、円形浮紋(2個1組)を施す。口縁部横ナデ。胎土砂粒多い。
20図		86	LP	Ⅱ層上面 25-00	弥生 土器	底部～体 部下半 1/3	復元底径 8.0cm 現存高9.7cm	灰白色(2.5Y8/2)	平坦な底部から直線的な体部が続く。外面ヘラミガキ、底部内面凹ナデ、底面強いヘラズリ。外面一部に焼成時の黒痕。胎土砂粒多い。
24図		87	OO	Ⅱ層上面 29-00	弥生 土器	高杯	口縁1/8 復元径25.0cm	灰白色(2.5Y8/2)	口縁は水平にのびた後、大きく下部に垂下する。垂下部上下端に浅い凹線施す。内面に突出部有する。水平部横ナデ、外面一部に焼成時の黒痕。胎土砂粒まばら。
24図	15	88	OO	Ⅱ層上面 29-00	弥生 土器	高杯	口縁1/5 復元径28.2cm	灰白色(7.5Y8/2)	口縁は水平にのびた後、大きく下部に垂下する。垂下部上下端に浅い凹線施す。内面に突出部有する。水平部および端部ヘラミガキ、外面一部に焼成時の黒痕。胎土砂粒非常に多い。
24図		89	OO	Ⅱ層上面 29-00	弥生 土器	高杯	杯部1/4 復元径32.4cm	淡黄色(2.5Y8/3)	碗形の杯部からやや屈曲して口縁部に続く。上端部は面をなし、浅い凹線を施す。口縁部に3条の浅い凹線紋を施す。杯部内面ヘラミガキ、外面一部に焼成時の黒痕。胎土砂粒多い。磨減激しい。
24図		90	OO	Ⅱ層上面 29-00	弥生 土器	広口壺	口縁部 1/4 復元径25.0cm	灰白色(5Y8/2)	端部は面をなし、上方にややつまみあがる。端部横ナデ。胎土砂粒多い。
24図	15	91	OO	Ⅱ層上面 29-00	弥生 土器	壺? 口縁部～ 体部上端 一部残存	復元径25.2cm	灰白色(2.5Y8/2)	球形の体部に短い口縁が続く。端部は面をなし、浅い凹線を施す。口縁部横ナデ、体部内外面横方向のナデ。胎土砂粒多い。磨減激しい。
24図	15	92	OO	Ⅱ層上面 29-00	弥生 土器	大形壺	復元口径 29.0cm 復元体部径 37.2cm 復元高50.1cm	灰白色(2.5Y8/1～10YR8/1)	球形の体部に短く外傾する口縁部が続く。口縁端部は上下に拡張する。口縁部横ナデ、体部外面上下4条/εのハケ、同下平ヘラズリ。胎土砂粒多い。外面下半部焼成時の黒痕。内外面とも磨減激しい。
24図	15	93	OO	Ⅱ層上面 29-00	弥生 土器	壺? 頸部一部 残存	復元頸部径 17.2cm	にぶい黄褐色(10YR7/2)～灰黄色(2.5Y7/2)	体部に2条の凹線紋、頸部内面に羽条帯指列点紋施す。頸部外面に横方向のヘラミガキ。体部内面横方向の強いナデ。胎土砂粒多い。
24図		94	OO	Ⅱ層上面 29-00	弥生 土器	壺 口縁～体 部上半 1/8	復元口径 13.4cm	灰白色(2.5Y8/2)～淡黄色(2.5Y8/3)	口縁部は短く外傾し、端部は若干つまみあげて面をなして終わる。端部には浅い凹線施す。口縁部横ナデ、体部内外面ハケ。胎土砂粒まばら。

実測図 番号	図版 番号	遺物 番号	出土 地区	出土層位 出土遺物	遺物の種類	残存率	法 量	色 調	特 徴
24図		95	OO	Ⅱ層上面 29-00	弥生 土器	甕	口縁? 復元口径 13.3cm	灰白色(2.5Y8/2)	口縁部は短く外傾し、端部は若干 つまみあげて面をなして終わる。 胎土砂粒多い。磨減非常に多い。
24図		96	OO	Ⅱ層上面 29-00	弥生 土器	甕	口縁1/6 復元口径 14.0cm	灰白色(2.5Y8/2)	口縁部は短く外傾し、端部はつま みあげて面をなす。口縁部横ナデ、 体部縦方向ナデ。全体にくすぶる。 胎土砂粒まばら。
24図	15	97	OO	Ⅱ層上面 29-00	弥生 土器	甕	口縁1/10 復元口径 15.6cm	灰黄褐色(10YR5/2)	口縁部は短く外傾し、端部は面を なして終わる。口縁一体部横ナデ、 体部外面ハツ後ナデ。全体にくす ぶる。胎土砂粒まばら。
24図		98	OO	Ⅱ層上面 29-00	石器	磨製 石鏃	先端部欠 損 長さ 4.0cm 最大幅2.0cm 厚さ 0.2cm 重さ 2.7g	灰色(N5/)	凸基部有式磨製石鏃。サヌカイト 製。基部側面は表面両面から磨き こみ、稜をなす。表面両面とも新 め方向の稜が残る。
25図		99	OO	Ⅱ層上面 30-00	弥生 土器	高杯	口縁1/2 口縁径22.0cm	灰白色(2.5Y8/2)	口縁は水平のびた後、下部に垂 下する。内面に突出部有する。胎 土砂粒多い。磨減多い。
25図		100	OO	Ⅱ層上面 30-00 上層	弥生 土器	甕	口縁～体 部上半一 部残存 復元口径 15.2cm 復元最大径 17.4cm	(外)灰黄色(2.5Y7/2) (内)暗灰黄色(2.5Y5/ 2)	球形の体部から短く外傾する口縁 部が破き、端部は受け口状を呈す る。体部外面板ナデ状の細かいハ ケ。胎土砂粒まばら。
25図	16	101	OO	Ⅱ層上面 30-00 上層	弥生 土器	甕	口縁～体 部上半一 部残存 復元口径 15.6cm 復元最大径 18.0cm	にぶい黄褐色(10YR6/ 3)	球形の体部から短く外傾する口縁 部が破き、端部はつまみ上げて面 をなして終わる。体部外面3条/ cmのハケ。体部下外面備行着。 胎土砂粒まばら。
25図	16	102	OO	Ⅱ層上面 30-00	弥生 土器	短頸甕	口縁～頸 部ほぼ完 存 口径10.2cm 頸部径7.9cm	にぶい黄褐色(10YR6/ 3)	体部から口縁にかけてならかに 移行し、端部は面をなす。口 縁に横ナデ有する。口縁～頸部 にかけて凹縁を5条施す。頸部外面 4条/cmの縦ハケ、内外面指オサ エ。外面に焼成時の黒斑。胎土砂 粒まばら。水害の可能性ある。
25図	16	103	OO	Ⅱ層上面 30-00 上層	弥生 土器	広口甕	口縁～頸 部1/4 復元口径 24.0cm 現存高10.0cm	灰白色(2.5Y8/2)	体部から口縁にかけてならかに 移行し、端部は下方に並重し面を なして終わる。端部に凹縁2条施 す。頸部にはヘラ状工具で刻み目 を入れた胎土帯を貼りつける。口 縁部横ナデ。口縁端部内側に焼成 時の黒斑。胎土砂粒多い。磨減多 い。
26図	16	104	OO	Ⅱ層上面 499-00	弥生 土器	要用品	1/2 復元径14.5cm 高さ4.5cm	にぶい黄褐色(10YR6/ 3～7/2)	中央の凹むつまみ部からやや凸凹 を有しながら裾部に続く。内面5 条/cmのハケ。外面一部焼成時の 黒斑。全体にくすぶる。胎土砂粒 多い。
26図	16	105	OO	Ⅱ層上面 499-00	弥生 土器	甕	口縁～体 部上半 1/4 復元口径 12.3cm 復元体部最大 径 15.8cm	にぶい黄褐色(10YR7/ 2)	球形の体部から非常に短く外反す る口縁部が残り、体部外面4条/ cmのハケ、内外面5条/cmのハケ、 外面体部中位以下備行着。胎土砂 粒多い。
26図		106	OO	Ⅱ層上面 499-00	弥生 土器	甕	底部～体 部下半 1/5 復元底径 4.6cm 現存高7.5cm	灰白色(2.5Y8/2)	体部外面ヘラケズリ。内外面3条/ cmのハケ。胎土砂粒非常に多い。

実測図 番号	図版 番号	遺物 番号	出土 地区	出土単位 出土遺物	遺物の種類	残存率	法 量	色 調	特 徴
26図		107	OO	Ⅱ層上面 469-OO	弥生土器 壺	底部一部 残存	底部径6.1cm 現存高3.6cm	赤褐色(10R6-4)	胎土砂粒多い。内外面とも磨減、剝離激しい。
26図		108	OO	Ⅱ層上面 469-OO	弥生土器 大形壺	口縁1/8	復元口径 32.4cm	残黄褐色(10YR8-3)	口縁端部は面をなし、その下端に 刻み目を入れる。頸部に磨合痕残 る。口縁部横ナゲ。胎土砂粒多い。 磨減激しい。
26図	16	109	OO	Ⅱ層上面 469-OO	弥生土器 大形壺	口縁1/4	復元口径 29.2cm	灰白色(10YR8-2)	口縁部は斜内側につまみ上げ、面 をなして終わる。口縁部横ナゲ。 体部外面へラケズリ(?)。内面 6条/αのハケ。胎土砂粒まばら。 内外面とも剝離激しい。
26図		110	OO	Ⅱ層上面 469-OO	弥生土器 高杯	口縁1/4	復元径34.4cm	(外)残黄褐色(10YR8-3) (内) = (7.5YR8-3)	口縁部は水平にのびた後、下部に垂 下する。垂下部下端に浅い凹縁 返らす。胎土砂粒まばら。磨減激 しい。
30図		111	NQ	Ⅱ層上面 55-OS	弥生土器 大形壺	口縁一部 残存	復元口径 33.6cm	残黄褐色(10YR8-2)	口縁部は上方につまみ上げ、面を なして終わる。口縁部横ナゲ。胎 土砂粒多い。
30図	16	112	NQ	Ⅱ層上面 55-OS	弥生土器 壺	体部上半 一部残存		灰白色(2.5Y8-2)～残 黄色(2.5Y8-3)	幅約2cmの同一厚手で施された帯 横直線紋(2帯以上)、同波状紋 (3帯以上)を交互に配する。外面 一部縦位のハケ。胎土砂粒多い。
30図		113	NQ	Ⅱ層上面 55-OS	弥生土器 短頸壺	頸部1/6	復元頸部径 8.0cm	残黄褐色(10YR5-2)	頸部はやや内湾気味に口縁部に接 く。外面に6条以上の凹縁紋施す。 内面強いナゲ。胎土砂粒まばら。
31図		114	OP	Ⅱ層上面 59-OP	弥生土器 広口壺	口頸部 1/8	復元口径 16.2cm	(外)灰白色(2.5Y8-2) (内)灰黄色(2.5Y7-2)	頸部は短く外反し、端部は面をな して終わる。口縁部横ナゲ、外面 縦が1/α、頸部に擦合痕残る。 胎土砂粒多い。磨減激しい。
31図		115	OP	Ⅱ層上面 43-OP	弥生土器 広口壺	口頸部 1/4	復元口径 13.0cm	灰白色(2.5Y8-2)	頸部は短く外反し、面をなして終 わる高面に1条の凹縁を施す。口 縁部横ナゲ。外面3条/αの縦が 1/α。口縁外面の一部に横付着。 胎土砂粒まばら。
31図		116	OP	Ⅱ層上面 296-OO	弥生土器 高杯?	頸部1/4	頸部復元径 12.9cm	にぶい黄褐色(10YR7/3)	頸部はなだらかに開く。端部は面 をなし、2条の浅い凹縁を施す。 全体にくすぶり、特に端部は黒く 変色。胎土砂粒多い。磨減・剝離 激しい。
31図		117	OP	Ⅱ層上面 306-OP	弥生土器 壺用蓋?	一部残存	復元径14.1cm	灰黄色(2.5Y6-2)	端部は肥厚し、端部に浅い凹縁を 施す。全体に黒く変色。胎土砂粒 まばら。

